

非ざれば、眞正しんせいの宗教しゅうきやうは活現くわつげんしないぞ。一切いっさいの經典きやうてん一切いっさいの法門ほふもんを破壊はくわいするに非ざれば、眞正しんせいの宗教しゅうきやうは復興ふくしやうしないぞ。それで衲なせは此間このまはら雜僧ざさうにも滅めつ禪宗ぜんしゅうと命名めいめいして遣やつた、即すなはち禪宗ぜんしゅうを滅めつせざれば禪宗ぜんしゅうは生しやうぜない。

四十八、乾坤一擲の仕事

茶ちやを啜すつて談だん盡つく、談だん雷らい即すなはち默もく雷らい余よ曰いはく話頭わとう盡つきし時ときの餘情よじやう如何いかぞと、老師らうし曰いはくサア今迄いままでの環たまきの如ごとき話頭わとうは、何處どこへ消くえた、何處どこへ行いつた。なに無なに歸かへした、面白おもしろいものぢやナ。
荒磯あらいその岩いわに碎くだけて散ちる月つきを圓まどろかに載のせて歸かへる浦波うらなみ
これが説せつ不説ふせつの境涯きやうがいと云いつてナ、釋迦しやくかもあれほど説法せつぽうして、最後さいごに一字いっじ不説ふせつと宣のたまうて居ゐる。之これを聽きいて呆然ぼうぜん自失じしつした羅漢らかんもあり、默契もくけいして起舞きぶした羅漢らかんもあるよ。

衲なせも一度いちどは、ナポレオンや成吉思汗せいぎしあのやうな乾坤一擲けんてんいつてきの事業じぎふをして見みたいと思おもつて居ゐたが、最もう人生じんせい五十年ごじゅうねんを超こゆること五ごぢや、餘生よせい幾干いくげんもなしぢや、併ひし生變せいへんつて大仕事おほしごとをする積つりである、却かえ々々氣きが長いぞ、アハハ、。

建仁寺けんじんじには歴代れきだい學者がくしやが出でた。五山ごさん文學者ぶんがくしやの中なかにても、最もと學者がくしやが多おほかつた。如何いかか今日こんにちも古いにしへの五山ごさんの一ひとに恥はぢないやうにしたい。いや學問がくもんは兎うに角かく此豆このまめの如ごとき爐火いろひの紅くわなを永劫えいげつに絶たしたくはない。

昔時むかし一人娘ひとりむすめを嫁よめに遣やらうと思おもつて、娘むすめにこんな事ことを云いつた母親ははおやがある。

「さあ今度こんどの縁談えんだんは二軒にけん一緒いっしょになつた、一方いっぽうは金持かねもちで、一方いっぽうは美男びなんぢや、お前は何方どちへお行きいきになる心こころかな。そりや母親ははおやの前まへでも言いひ悪わるくか
らう、それでは金持かねもちの方かたへ行いきたければ左ひだりの肩美男かたびなんの方かたへ行いきたけ

れば右の肩をお脱ぎ
と云ふと娘は恥かしさうにくるりと双肌を脱いだ母親も呆氣に取られて、

「それでは話が出来ん、どちらか一軒に極めんと困る」と云ふと、其娘は、

「はい、それでは晝は金持の方へ参り、夜は美男の方へ行たうムります」と云つたとの話があるが、此娘の言葉には人情の偽らぬ處があつて却々禪機があるよ。

衲はこんな狂歌を作つたよ、

何事も見ざる言はざる聞かざるも思はざるには及ばざるなり

と云ふのぢやが、貴郎には大分法螺を聴かしたからナ、これでは言はざるぢやない、能言能見能聞の猿ぢや、アハハ、。

雲門の會下に香林と云ふのがあつた。一々雲門の言葉を紙衣に録して保存して居たが、此禪機もつまり其紙衣のやうなもので、仕舞ひには面白ひものになるぢやらう。

四十九、入禪の用心

兎角學者風の人物は、體一杯にいろんな物を詰め込んでをるので、一朝坐禪でも仕にかゝると、其詰め込みの雜物が邪魔して困る。其處で禪は腹の空虛を貴ぶ——空虛とは妄想を謝絶し盡したさまで、只の但空ではない。かどうも一度は何にがなしに空虛にさす必要がある。左もなけりや三昧に入ることが出来ぬ。夫れに就き面白い話がある。衲の居士に某と云ふものがある。其者が禪を遣掛けて見たが、例の雜物が出しや張つて困ると云から、衲が譬喩的に坐禪を仕様と思ふなら、まあ其の前

にとんと下劑をにかけてから掛るが宜からうと言うた。すると先生夫れを語の如くに直解して、歸宅後強力の下劑をにかけて、大迷惑をしたと云ふ滑稽談がある。卒直は求道上貴ぶ所だが、こんな卒直も時には閉口する。其處で其居士が遣つて来て、老師、僕は命令通り下劑をにかけて連日下劑を續けて此の通り腹が空虚に成りました。此以上はどうしますかとの問ひで有つたので、衲も一時は驚いたが、夫れから無形の下劑と有形の下劑の正誤をしてから、徐ろに彼の學歴を聞いて見たれば、其の男は哲學館の出身で、印度哲學を研究したと云ふ事であつたから、先づ其哲學館仕込の雜物を下瀉排泄し盡す方法を授けてから、庭前柏樹子の古則公案からかゝらした事である。

或時又某師家が、そんなものに柏樹子を拈提さすのはちと無理だから、先づ無字か隻手位が適當だらうと言つた。然るに夫れは餘計な心配

で、公案に順序は不要だ。唯相手の根氣次第で、どんな公案でも授ける。畢竟一句能く透得せば、一超直入如來地で、三千大千世界の有像無像束ね來りて屁のかつばである。其の一句透得の境は即ち一超直入であるから、最初種々様々に想像した禪と云ふものは、振り返つて見て、何時通つて來たか判らぬ位迅速にして機敏なる活動をするが禪の活力である。四十二段の階級も、一々登れば四十二の段梯子、一氣に超越し去れば、法界無量の大廻向で、此方よりも寧ろ向うから辭義して遣つて來る。何でも此處で平等施一切の大活用が顯現するが、其の其處に到るは坐禪でも經文でも差支はなけれど、而も禪の方がやはり速成的の近道である。

五十、僧寶と僧業

百姓は農業で、商賣人は商賣で、其處で坊主は僧業である。此僧業は百姓が農を業として農學を知らず、商人が商を業として商法を知らぬと一般で、唯佛弟子の姿で以て遺教を切り賣りして居る坊主の有様では、到底三寶の隨一たる僧寶とはなれぬ。僧寶と僧業相照らして實に霄壤月籠も管ならぬ。然るに今の坊主は野蠻時代の百姓が農學を知らずして、やたら耕作をするが如く、商人が商法を知らずして姑息の商賣をしてをると一般、自己の口腹を充たす可く營業としての僧侶であつて、社會から見ても眞個人天の大導師と崇める僧寶と云ふ寶になる資格はないのだ。

在昔徳川家の役人が、其菩提所たる芝増上寺に出張して、寺の役僧に面會の上、

「さて此度御當家御先祖の御廻向を頼む譯だが、夫れに就て聞きたき

は、一體廻向とか菩提とか云ふことは、如何なる理窟の者にや、此儀一應心得置かずでは、手前共の役儀も相濟まぬ」

との難問であつた。難問實は容易な問題である。然るに平素僧寶で無くて僧業で遣つてをる坊主どもは、かう眞面目に突き込まれると大狼狽だ。其處で役僧共は平素口頭では御廻向だの菩提だのと殊勝氣に喋つて難有さうな讀經など遣つて居るけれども、其意義に於ては無論蠻界の百姓や商人と同一であるから、本分に就ての問題が起ると大狼狽だ。畢竟其實質に於て僧寶と僧業は商賣違ひ宗旨違ひだから、狼狽するも無理はない。其處で彼の増上寺の役僧は平素不用意の事を尋ねられたから無論即答が出来ぬので、

「何れ篤と評議の上御答に及ぶ」と云うて其場を通れたと云ふ滑稽談がある。今日でも其通りで、若し圓

頂黒衣の徒が悉く佛弟子だと思ふと宛が違ふ畢竟問題に至れば篤と評議の上御答に及ぶ連中だいや蠻界の百姓未開の商人だいなく聲を賣り姿を賣る扮擬師だ俳優だ藝人だ其處で其俳優で以て上手な奴が御前さまだ御法主殿だ大僧正ぢや俳優が武將名相に化けた時は武將大臣に見えるけれども彼れは其面に白粉つけたり付け鬚をしてそんなものに見せて居るのだ夫れを知らずに直ちに其役者を取ッ捉まへて武將や大臣の精神的質議をしたなら氣の利いた處で一同評議の上後刻返答に及ぶとやるより外に仕方がない大體が扮擬師だ體達家とは違ふ佛制の袈裟法衣を被着して佛弟子に扮擬して居るのだそんなものに佛弟子の精神を聴くなんか役者に武將名相の精神を聞くと一般ぢやだから衲の主張する否な我が禪門佛心宗の教ふる處は其の扮擬を捨て一超直入の體達的を以てするのだ自己が直に菩薩とな

り如來となる活法を教ふるのだ四十二段一超直入の境界は能所共に亡ずる境界で此處でやる廻向が眞實の廻向である此境界に達せずしてやる廻向は唯其形式を扮擬して居るまで、上手に遣つた處で役者の亞流だ他宗他門はいざ知らず我が此宗門には白粉役者は眞平御免だ

五十一、同凡而非凡

眞實廻向で極上根になると更に四十二段をも飛び超えて鼻毛一本の端に百千億の淨土を現じて種々の法を成壞自在ならしむること恰も壯士が臂を伸すに他力を借らざるが如く獅子が歩行くに小獸の伴侶(妄想)を求めざるが如く乾坤唯一人の境界だいろくの勝妙が現前しても何とも思はぬ天華が降つたとか優曇華が咲ひたとか此頃も此僧堂に優曇華が咲いたが何んのことはない比叡山の四明ヶ嶽に大き

な佛が出現して大阪迄も見えたとか、其他種々悪業の境界が現前して
 も構はぬ、隱岐の島から幽霊が出たとか、霧島山から灰が降つたから、妖
 怪博士が方便談を並べたとか、一目大入道が出た處が、相手が盲人では
 何ともなかつた。縁に隨つて放曠し、性に任せて逍遙するといふ、安眠高臥
 の境界には、天堂もなければ地獄も無くなつて仕舞うのだ。古徳永嘉は、
 亦人もなく、また佛もなし、大千沙界海中、一切の賢聖は電の拂ふ
 が如し。

と云はれたが、見性の境は一閃電の如しと雖も、其根源に徹せずして止
 めば、却て因果撥無の外道となり了るなり。有無非有非無、亦有亦無、非非
 有非非無の四句より百非が生じて來る。東西兩洋の哲學も、此四句に依
 つたのである。世界の學問も、宗教も、皆此範圍内であるぞ。獨り此四句百
 非を打越したのが禪である。四句を離れ百非を絶して、直下に一刀兩斷

して、更に後を念ひ前を思はずして、千聖萬佛の絶頂を坐斷せしむるが
 禪である。向う(常人)も好天氣なれば、此方(禪者)も好天氣で、少しも變りは
 ない。處が宇内は和光同塵であるが、而し同じ様で違ふ處のあるに注意
 一番せよ。六大師の外道は六根に依つて見解を立てたが、間違つて居るけ
 れど、禪者も表面一寸瞥見すれば、之れと上下し之と昇沈しつゝある様
 である。少しの處が大いなる處である。凡と同じて非凡の處があらざれ
 ば、薩張區域が立たぬ。同凡而非凡の處是れ抑も禪者の態度なるかな。

五十二、惡魔の翫弄物

世には自家の本職本業に冷淡にして、他の餘業に精力を濫費して嬉
 しがつて居るものがある。そんな時には憐れむべし、彼は惡魔の爲に魅
 せられて居るのだ。夫れに氣が付かずして、いや己は詩が出来るとぞ、わし

や陶器がひねれるぞ、拙者は弓術に妙を得た杯と來ちや、もう惡魔が提
げる藥籠中の翫弄物だ、其翫弄物と成り濟まして、敢て綽々の餘裕を誇
るなんか實に氣の毒千萬だ。

昔支那で名高い馬大師が山林の中に坐禪して居ると、突然一人の獵
師か遣つて來た、其處で馬大師が、

「汝が能射如何」

と問うたら、彼は言下に、

「百發百中」

と答へた、其處で馬大師が、

「汝が射猶ほ精ならず、我に一箭一群を射中するの術あり」

と吹飛ばしたら、件の獵師は之を聽いて、

「我れに其妙術を授けよ」

と頼んだので、馬大師は、

「然らば、吾が命ずる所に從うて背く勿れ」

と云うて、是に坐禪を命じた。元來百發百中と云ふ程の氣力ある獵師だ
から、最初は愆心から遣りかけたが、忽ちにして大悟徹底して、石鞏和尚
となつた。其後多くの求道者が石鞏の英名を傳聞して來り、求めるもの多
かりしが、彼は問者が、

「佛法の大意如何」

と云ふと同時に、忽ち弓箭を取つて、滿月の如くに引絞り、

「汝の胸膈を披いて此の箭を見よ」

とやるので、凡庸の道者等この勢に避易して逃げて仕舞うが例であつた。
然るに最後に遣つて來た奴は、どえらい度胸漢で例の滿月を見て、些
の恐懼の色もなく、胸押し披いて悠然として突き當つたので、石鞏は、

汝の器量猶ほ完たからざるも、吾に半個の正人を得たり、吾壽命消滅に近し幸に汝を得て正法を附屬す。

とて傳燈を相承された話がある。夫れが即ち三角山の平禪師である。凡そ志士道を求むる宜しく斯の如くなる可しだ。乃ち專一専門其命を賭して職に殉じ業に盡す可しだ。然るに近來の人職に冷かにして却つて餘藝に耽ける是れ納が目して悪魔の翫弄物と罵る所以である。

五十三、悟道を手品にする偽物

大悟徹底固より容易の業でない。容易で無つて穴勝年代が長くかゝると極つたものではない。昔白隱禪師の居士に、木原平四郎と云ふ勇士があつた。彼は總身から熱血が迸るほどの勢で工夫した結果、たつた一日て大悟徹底した。だから徹ると徹らぬとは、其人の精意と勇怯に在る

のだ。眞に禪を修するものは大精進と大勇猛を要する。勇氣なきものは精進なく、精進力なきものは成効がない。因果靚観争ふ可らずだ。

世間では口を巧に使つたり、理屈をうまく考へて、一かどの悟道家を以て任ずるものがある。夫んな奴が少しばかりの悟道を種に手品を遣つたつて、夫れで自家に何の所得があるか、つまりのチンバ修行で、生死解脱の大活用は出来ぬ。

譬喩は最も大切な方便だ。だから釋尊も、始終巧に譬喩を利用して、破邪と顯正を試みられたが、夫れはつまり方便だから、結局に至りては無用の長物だ。無用の長物だが、實は無用の長物でない。

禪の目的は不思議解脱の境涯に在る。境涯既に不可思議なれば、一切の譬喩も亦た不可思議だ。譬喩と境涯を別途に見るは、修行未熟の境遇だ。譬喩即境涯、境涯即譬喩、極處即初門、初門即極處、どちらを觀ても惣

悟道を手品にする偽物

て不可思議の境涯である。

昔白隠禪師がまだ十八歳の頃一切の道教中佛教に上さるものなしと信じたが併も其中で妙法蓮華經は、四十餘年未顯眞實の經典であるから經典中の經王と信じて拜讀を始めて見た處が讀んで半ばに至れば其説く所悉く譬喩ならざるはなしである處から忽ち倦氣を生じて是を廢讀した。夫から以心傳心で教外別傳の坐禪を始めてから膏汗を流して骨折つた結果、やつとの事で解説の境に達してから、年齒積んで五十歳の時、最初廢讀した法華經を取りあげて再讀して見ると、有り難いとも／＼何んとも云へぬ有り難さで、昔捨てた一句一字、さらに捨てるものがなく、八卷の妙典見るに隨うて大光明を放つて居たとの話である。だから經典の取捨などは、畢竟經典に存せずして、悉く自家の達不達にあるのだ。去れば未解脱不得道の儕輩にして、敢て佛説祖語を云々

批評するなどは、畢竟して自家の未解脱不得道を自白して居るのである。處が其自白漢が随分目のさきにならつて居るよ。

◎五十四、三橋飛驒守の禪機

昔三橋飛驒守と云ふ町奉行が有つたが、彼は禪機を得たる一名士であつた。或時部下の輩を集めて弓術大會を開いた。其時賞品を與へた遣り方が、中的者の外に不中的のものまでにも與へられた。其處で、中的者は多少不満に思つて、

「中不中を論ぜず賞譽せられたは如何なる御意見か」と尋ねると、奉行は呵々と一笑して、

「能射者不當的だ。的に當てた貴様等は、矢を放つ迄に呼吸が三度變つた。能く當てぬ方は的にこそ放れたれ。其呼吸は實に平然と有つた。だ

から當てた方は實戰に間に合はぬ當てなかつた方が却つて實戰に
 大威力を現はすのだ實地の用は中と不中に關せず其態度其心持の
 如何に在る呼吸迄變へて的に中てたとて夫れが何の功名であるか
 といはれたさうである。
 味噌の味噌臭きは上味噌にあらずで柄も一時は随分其味噌を振り
 廻して獨りてよがつた事がある大慧禪師が發願文と云ふものを書い
 てをるが夫れが淨土宗の發願文と殆んど一致して居るから柄は之を
 一見して私に冷笑を拂つた處が其後多少老熟を自覺してから初に棄
 てた大慧の發願文を熟讀して見ると其味實に津々として不可言底の
 感動がした乳臭にして妄りに言議を弄す老來懺悔を招く眞に少から
 ずである。

五十五、快僧南天棒

此間南天棒の鄧州が東福寺へ遣つて來て頻りに九州地方の巡教談
 を遣るから柄は之に對して輕薄連の招待を受けて法の安賣をするは
 不見識ぢや大導師は宜しく動ぜず騒がず唯泰然として來り求むるを
 待つ可し蓋し誠實の求道者は師の到るを待たず必ず自ら來りて禮を
 正して師に聽くを例とす然るに公は其來るを待たず酒も大好き蕎麥
 も結構と足を空りに飛び廻るとは近頃以て輕卒の沙汰なりと云うた
 ら南天棒はいや夫れは一派の管長にして始めて行はるゝの藝當なり
 柄等の如きは旅稼でもせねば到底法に盡すを得ずと遁辭して居たが
 どうも斯んな工合で法の安賣をするから困る此等が所謂孟子の苗を
 助けて長じさしたと自慢した馬鹿百姓と同一だ法を穢した處を法を

興したと誤想して居る、而も其誤想家が當代の護法家と目されて居る。世が浮薄になると、萬事がかう顛倒して來るのだ。

南天棒は元來無邪氣で資性實に愛すべき好人物である。先度も話したが、南天棒の携帶を中止してはどうかと、いつたら根が正直にして純朴なる彼は、忽ち其棒を投じて見せたが、彼は無邪氣にして人の忠告を容れる餘地あるのみならず、又能く人の善言を敢行する勇氣の有るは、感心で、要するに彼は一派管長の器量がある。

師家に必要なのは見識だ、此見識にして備らば、棒も要らねば如意も要らぬ。柄も古くより、珍重の一棒、如意は有れども、夫れは皆秘藏して物置の中に秘めてある。禪家の師家といや、よう如意とか棒とかの邪魔物を擔ぎ廻るが、ありやチト役者めいて面白くない。柄は勤行の時でも扇子一本も持たぬ、提唱の時も茶も飲まぬ、當時は平生煙草も吸はぬ。

經文は故紙である。こんな物に拘泥したら大變だ。拘泥されぬと謂つて大切にせねばならぬ。古新聞の一枚も宜しく大切にする必要がある。況んや金口から出た經文に於てをやぢや。此處が平等差別の按配ぢや。善惡順逆ともに思量せず、一刀兩斷して些の遲疑を挾さぬ處が佛家の本領だ。華嚴の、

心妄りに過去の法を取らず、亦未來の事に貪著せず、現世所住あらず、三世悉く空寂なり。

と教ふる所即ち此の消息なりだ。既に善く此處に了達せば、行住坐臥自から趙州の無字に入りて、蕩々地として善惡を思量せざる境遇に到る可しだ。

五十六、漫性坐禪

漫性のぶらく病は治療が六ヶ敷やうなもので、坐禪でもだらくの漫性坐禪は終に駄目だ。どんな人物でも一身上に係る一大事が降り湧いて來たら随分五日や六日は寢食を忘れて、是が解決を求むるが例だ。是れ畢竟真面目の眞實問題であるからだ。坐禪も亦た然りて生死の大事は出息が入息を待たぬ、緊急中の最大問題である。妄想煩惱の魔軍を相手に、突貫惡戦をせねばならぬのである。

だから禪定の覺悟は、不撓不屈勇猛精進でなくてはならぬ。而も妄想煩惱が變現自在の働は、到底臺灣の蠻民が猿猴も及ばぬ輕妙の馳突奔走するのを、我官軍が是を追撃するの比ではない。實に彼の働きは生蠻以上である。露兵以上である。其強敵を相手とする場合にだらく坐禪の漫性を以て、どうして是を降伏さすことが出来るか。

臺灣島の我守備隊は、元來世界に冠たる我神兵の一部である。だから

大概の奴なら之を膺懲するに困難はない。けれども彼は山嶽原野を奔馳すること電の如く、森林樹陰に隠るゝの巧なる猿の如くであるから、流石に武勇冠絶の我神兵でも彼の奇襲に逢うて意外の不覺をとるこ
とがある。然るに是を處するに若し許し得れば、彼等の隠れ家たる森林原野を焼き拂ふか、打ち壊して其遁竄所を無くするが第一である。是がつまり禪的の第八識打破の遣り方である。故に我禪門の行者は、先づ妄想煩惱の巢窟を覆して其所住所を奪ひ、然る後徐ろに是を追討を繼續して、根本的全滅を謀るべきである。

一夏九十日の接心修行は、是れ正しく巢窟顛覆に従事しつゝある決闘期である。此間の態度は、恰も軍隊の貔貅が家庭を念はず、家信に著せず、一意専心敵對行動を以て敵を膺懲追撃する如く、自坊を念はず、師寺を思はず、電報が來うが、使が來うが、側目も振らず、一心不亂に遣らねば

ならぬ。出征中の軍隊は、家庭や故國の情誼を忍ぶ如く、修行中の身は故郷の事は断然念頭より捨離すべきである。

禪者に七人の師ありとの古言は、茲處ぢや。師匠が死んでも歸省せぬとは、人情以外の沙汰の様だが、そんな事は俗情ぢや。衲も修行時代に師匠から種々の手段を以て衲に歸院を促したが、或時電報に續いて特使が来た。夫は師匠死亡の通知と迎へてあつた。衲は一時は人事を忘れる程驚いたが、此處が所謂大事の關所ぢやと考へて、一大勇猛心を發揮して断然歸省を謝絶して、毅然として坐禪三昧を守りて、足一步も僧堂を出なかつたが、思ひきや、夫れが虚偽の電報や使であつたが、若し此時衲が俗情に誑されて歸省でもしたら、修行中絶の身となりて、自分も師匠も俱に悪魔の眷族と成つたに相違ない。實に危き刹那であつた。

五十七、佛魔一枚

魔佛の境、其差實に間髪を容れずである。衲が虚偽の電報や特使に欺かれたら、師匠は魔王、衲等は眷族ぞ。夫れを自分の決心で以て截断したればこそ、悪魔の境涯に墮落せず、済んだ。修行中には得てして斯る魔障のあるものだ。

時代は末法、人は劣根など、自ら卑下してかゝる念佛がき等は、兎ても自家の主人公を發見する事は出来ぬ。釋迦何人ぞ、吾何人ぞと、一大見地に住して、禪的奮闘をなす場合には、念佛唱題更に何の役にも立たぬ。坐禪に頓悟と漸悟の二つがある。然るに人ありて、我は頓悟の力もなく、去りとして漸悟の様、に歲月を涉りてごつ／＼遣るもいや、茲に何か好方便が有るまいか、抔と注文する相手がある、斯る場合には、まさにか

遣る可しだ曰く、

問ふ 汝は何處の人ぞ。

答ふ 神戶の人なり。

問ふ 汝の在所を念ふか。

答ふ 吾常に吾在所を念ふ。

問ふ 彼處に山あり海あり又人馬あり。汝思底を返し見て有るや否や。

答ふ 一切有ることを見ず。

と此問答當に此の如くんば乃ち正に斯の如く云ふ可し曰く、

汝の見解猶境に在り。信位(悟道を思ふ心)可なるも、人位(主人公)可なら

ず。

と、達磨の二祖に與へし印可は、即ち此の場合たり。磨は假令可とするも其間實に一髪を容れず、人多く影法師の誤魔に逢ひ、遲疑百端遂に一刀

兩斷の快舉を謬る行者の心すべき實に茲に在りだ。

金と涙は出しにくきものぞ。嘘や詐りて出ぬが涙だ。最愛の子女が死

んだ親子の情としては哭かすには居られぬ。哭け泣け大に哭け。親子の

關係は千生百劫の久しき習氣流注の團ぢや。酒の二日酔は醫者よ藥

よと騒ぐよりか、迎酒の一杯も仰ぐに限ると、平時も上戸の説法を聞く。

足が石に躓いて大地に墮れた奴は、又候大地に手を突つ張つて起るぢ

やないか。白隱會下の阿薩婆が孫が死んだ時に珠玉の涙を流して弔つ

たは茲の消息ぢや。坐禪した婆が孫の死に哭き崩れるは、賈坐禪だると

は愚俗の見解婆の涙は珠玉の供養と喝破した婆は禪者の見識ぢや。妄

想から出る涙と、悟道から出る涙は、同じ液體でも夫れ程(罪惡と功德の

違がある。

五十八、提唱斷片

釋迦出現したのは何の爲めであるかとなれば、云ふまでも無く一大
 事因縁の爲めである。故に釋迦計りては無い大丈夫の漢たるもの、所
 作所爲は皆な是の如くにやつてのけて貰ひたいものだ。實に無常迅速
 にして生死事大なれば、一日を過したれば即ち一日の好事を銷したる
 から、畏れ謹むべきことである。大燈國師の遺誡中にも、
 只須らく十二時中無理會の處に向つて究め來り究め去るべし。光陰
 箭の如し、謹んで雑用心すること勿れ
 と。老婆心切に誠めてあるが、昔から海岸に住んで日夜波上舟中に勞働
 して居る者は、一點の浮雲にも能く注意して、安危榮枯損益生死間の時
 機を失せざるもので、彼等が狂瀾怒濤の中に在つて、我れを忘れて働く

のは水上一種の坐禪とも謂つべきものだ。又水意なきものを水中に投
 ずれば、周章狼狽する計りであるが、水中にあつて幾多の艱難を嘗め、歲
 月を重ねる程游泳に熟達し來つて、波上水底をも何とも思はぬ様平氣
 になつて來て、どこに艱苦があるかと云ふ風で海上の境涯は海を見た
 事もなき奥山育ちのものにわかりさうな筈がないのだ。波上の勞働も
 水練も、一時に俄か細工に熟達すべきものでない。只其日／＼を好時機
 として、油断なく日々是れ好日と不撓不屈でズーとやつて行きさへす
 れば、自然と妙處に到達する事が出来るのだ。然るに多くのものは名聞
 利養に走り、何事を爲すにも此の名利を基礎としてやるから堪らない。
 此程も吉田中學生を一人勸告誘引する賃料が五圓づゝであつた相
 だが、死鼠は大小となく一疋五錢で買ひ上げるから、中學生も死鼠百疋
 の價値で教育家が買収するとはどうだ。又醜中の醜たる教科書事件も

あつた程だから、大學でも博士でも、佛敎基督教の學者でも、薩張信用の
 出來ぬ名利の奴隷計りだ斯の如き闇黒界なれば、眞正に善惡美醜を作
 業上に差配することを識らざる時代なるに、能く此の心を回らして無
 上菩提を學ぶ善き方に氣が附くは、此れは是れ世界上第一等容れが
 たき靈利の漢と斷言することが確かに出来るよ。

昔徳山和尚の如きは、金剛經を脊負うて行脚し、餅賣婆の痛撃を受け
 て、我が行爲が陸上の水練であつたと昨非を識つて、一大事の坐禪に骨
 折られた方であるから、今の居士大姉等も入室さへすればそれで足れ
 りとして居られては困つたものだ。如何に獨參したからとて、下手な公
 案がいくら徹つたとて何になるか。又つまらぬ見識を吐き、法螺を吹い
 てそれが何にもなるものでは無いから、坐れ、大悟堂に坐れ、其の坐
 るのにも起心動念したり、肚裏熱忙して、急に悟らんと要する事を得ざ

れだが、纒かに此念を作さば、則ち此の念に路頭を塞斷せらるゝ事を被
 ひつて、永く悟りを得る能はずだよ。三祖大師の信心銘に、
 之を執して度を失すれば、必ず邪路に入る。之を放て自然なれば體去
 住無し。

と云はれてあるが、此れは三祖が心を吐き膽を吐いて、人の爲めにする
 處である。實に一法を執する處あらば、皆な咎にして、己見未だ忘れざれ
 ば、我相猶ほ存するが故なれば、何んでも一切萬本を放下し、本來無相に
 して、只一念不生自然無去無來處でやるのだ。但日用力を費す如く爲す
 べきものでなく、この禪門には力を費やす事を要しない。そこで得力の
 處は、省力の處で、其の力を省く處が、力を得た處なれば、若し一念の希望
 する心を起し、悟入の處を求めば、吾が家に在つて自家の住處を他人に
 問ひ覓ると同じく、白癡漢である。但生死事大を鼻頭に貼附して、忘失す

る事なく公案を提撕せば、自然に熟達するのである。坐禪の遺誠となるべき天目中峯國師の座右の銘は、就中面白いから唱へて見やう。

末世比丘形似沙門。心無慚愧。身着法衣。思染俗塵。口誦經典。心想貪欲。晝耽名利。夜醉愛着。外表持戒。内爲密犯。常營世路。長忘出離。

一道心堅固。須要見性。二疑着話頭。如噬生鏹。三長坐蒲團。脇勿着席。四見佛祖語。常身慚愧。五戒體清淨。勿穢身心。六威儀寂靜。莫恣暴亂。七少誤低聲。莫好戲笑。八雖無人信。莫受人謗。九常携帚。掃拂堂舍塵。十道行無倦飽。莫飲食。

生死事大。光陰可惜。無常迅速。時不待人。人身難受。今已受。佛法難聽。今已聽。此身向今世不度。則向何處度。此身眞實に不疑の地に到れる者は百練の鐵の如く、假令千聖百佛が出頭し來つて、無量の殊勝の境界を現するも、之を見ることが亦見ざるが加く

なれば、増して奇特殊勝の道理を作すべきものでない。不老不死の地に徹底するも亦其處に停止せずして、それをも打抜かねばならぬ。昔薬山和尚が坐禪して居るのを師の石頭希遷禪師が見て、

「其處に在つて何を作すか」

と問うた。薬山の云く、

「一物も爲さず」

と石頭亦云く、

「然らば閑坐なり」

と薬山應へて云く、

「閑坐ならば則ち爲すなり」と。そこで石頭之を、

「然り」

と云つた事がある。古人も今時も、多くは黙照坐禪たる閑坐の處に停止して居る者が多いが、之は無益である。雲門大師が、

光透脱せざれば兩般の病あり、一切の處明ならずして面前に物あり是れ一つなり。又一切の法空を透得すれども、隱々地に箇の物あるに似て相似たり、亦是れ光透脱せざるなり。又法身に兩般の病あり、法身に到ることを得れども、法執忘せざるが爲めに己見猶ほ存して法身邊に坐在す。是れ一つなり。假令法身を透得し去るも、放過すれば即ち不可なり。子細に檢點し來れば甚麼の氣息かあらん。亦是れ病なりとある。又曰く、

而るに今の實法を學する者は、法身を透過するを以て極致と爲す、而も雲門返て病と爲す、知らず法身を透過し了て何をか爲す、這裏に到つて人の水を飲んで冷煖自知するが如く、別人に問ふことをもちひ

ざるなり。中略人の喫飯して飽く時の如きは、更に人に我れ飽きたるか、未だ飽かざるかを問ふを要せざるなり

と云うてある。又臨濟和尚は、
汝若し念念馳求するの心を喝得せば、釋迦老子と別ならじ。是れ人を欺くにあらざるなり。方さに知るべし。三界萬法一切元無なる事を直に是安樂快活にして放得下す

と、乃ち其の偈に、
淨潔の處を戀ふ事莫れ、淨處は人をして困せしむ。快活の處を戀ふ事莫れ、快活は人をして狂せしむ。水の器に任せて方圓短長に隨ふが如しとあるから、淨穢不二の境界を手に入るべきである。

禪宗だからとて第一義諦計りを振り廻はすものではない。全く依人度生である。然るに大慧禪師が五家七宗の要を集めて、正法眼藏といふ

禪書を著はされたのを、張侍郎居士が見て、大いに不平を鳴らして云ふ様には、

臨濟の會下に機鋒に鋭き好漢數輩を其中に收め入れずして、義理の禪を説いて俗家の男女を教懐し、老婆禪を舉揚する忠國師を入れてあるのはいけな。是非之を刪るべし。

と云はれた。其の時大慧禪師が居士の誤見を正された書に、
「忠國師は居士が誤解して居る様な方では決して無い。蓋し衆生の根器同からざる故に、諸祖各々門戸を立て、衆生の機を調べ、機に随つて攝化するのである。然るに此理を鑑みず、擊石火閃電光の境界を下劣の根機の處に之を用ひなば、孟子の所謂苗を助けて長ぜしめんが爲めに、之を振ぐが如きものである。居士にして若し諸家の門戸を去除して、己の見解に似たる者のみ收めんとならば、居士自ら一書を集め

て大根機の者を化せよ、禪に衆體を備ふるが故に、衲は此の一類の根機の者を救ふものである」と云はれた。

凡べて禪には理致機關向上の三段があつて、聖一國師や白隱禪師が、此の三段を八釜敷云うて居らるゝが、どれにも能く熟達せなければならぬものである。然るに師家中にも、機鋒のみあつて理致機關が至つて不完全な方もあり、又居士の中でも、張侍郎に能く似たものがあつて、兎角學問を鼻に掛けて、文學的理窟禪や機鋒のみを振り廻すから、故鳥尾得庵や渡邊大内等の如き邪禪が出来るのである。
武藝に於ても先づ最初にかたを教ふるが、之は繪畫の敷寫しの様なもので、彼の支那人が字を書くことの巧妙なのは、最初習字の時に手本を敷寫しにして、字格書體を亂さないから、之に熟練した後、到つて自

由自在に書いても、自然と其法則に該當して居る。又彼の仙崖和尚の畫は、無茶苦茶に描いてある様に素人には見えるが、決してさうでない和尚は眞面目に繪畫を學んだもので、偶には和尚が描き遺された本畫を見ることがあるが、それは、實に畫の法則に契合して決して法を超えて居らぬ。此の素養があつて、而して後に無茶苦茶の様な越格の畫を描いてこそ、眞箇の價値があるのだ。坐禪も亦其の通りで、最初は古則公案のかたを能く使ひこなすことに努め、それから悟後の坐禪廿年も歴ざれば、心の欲するところに隨へて法則を超えず、隨處隨時に主となると云ふ事は出來ないのだ。

張侍郎居士が忠國師を老婆禪で無益だと云つたのは、恰も相國の獨園に、和尚は老婆禪だから眞箇の用を爲さぬと云ふのと同じだ。しかし近代に於て獨園和尚ほど、能く老婆禪を應用したものは無い。そして其

老婆禪を巧妙に用ひた丈けそれだけ亦眞箇の禪の力量があつたのだ。末寺の尠い貧乏本山で、碌な檀中もない相國寺に居ながら、歸依檀信徒が遠近より群集し、多くの大衆が各他山より來つたのは、必ず甘ひ處と、びりつとした辛ひ處とを具足して居られたからだ。否、全く五味七味、五家七宗の禪を得て居られたからである。

五十九、懷舊談

▲米春 柄が十六歳の時であつたから、明治三四年の時分だ。妙心寺の越溪和尚に就いて居たが、其時分に一日に米や麥の五斗俵を舂き上げねばならぬ日があつたが、いや我慢で遣つたものゝ、見受の通り、此蒲柳の體で、其日課を遣つたのには、眞に膏汗が流れた處がまだそんな事でない、ひどい事がある。夫が、

▲高臺寺山の柴刈 だよ。此處建仁寺に居て高臺寺山へ行くなら左ま
 へにもあるまいが、思つても見玉へ、荷も洛西花園の妙心寺から、洛東の
 高臺寺山へ柴刈に来て、そして又候夫れを擔つて、花園まで返る仕事ぢ
 や、…さうさ、其量が大東三把で、夫を刈り採つて、京都市中を横切つて
 妙心寺へ歸るから、市内では一息も休むことが出来ぬ、是非とも二條城
 の北手までは擔がずして、一息とは參らぬ。そして其規則が同年齡位の
 もの二人を一組として、相棒で六把をさして擔いで行くのだ。柄の相棒
 は、今の丹後國清寺の義泰和尚であつたが、和尚は今辨慶と云はれた程
 の巖丈男、其相手が柄と來ちや吹けば飛び相な弱虫もの、夫れが辨慶と
 互格の腕力を出さねばならぬから耐つたものでない。其途中では腰は
 ひろつく、肩はひける、兩眼が眩んで倒れ相になる事があつたが、いやは
 や今と成つては、一昔ぢや、處が此柴刈で、其時分に、

▲大滑稽 があつた。夫れが今では駿河の名勝、興津の清見寺に住職し
 て居る坂上宗詮ぢや、其宗詮が當時の役位で、採薪の監督であつたが、例
 の採薪隊の一行に加つて、四條の川東まで遣つて來ると、突然横合から
 牛が出たので、和尚之を避けよとして、誤つて大事の行厨を落したのだ。
 なに行厨と云ふと、何だか珍味佳肴でも有る様に聞えるが、實の正體は
 純麥の辨當さ。

▲箸いらすの食料 と云へば、氣の早いハイカラ連は、は、あ妙心僧堂
 では食パンを喰つて居たなと思ふかも知れぬが、どうしてどうして食
 パンなんかは、其時分拜聴したこともない柄等だから、まして拜んだ事
 は更にない。今云ふ箸いらすの食料とは、全くの天井粥ぢや、一體僧堂生
 活と云ふものは、そんなものぢやが、特に其時分には、世が不作であつた
 から、僧堂と來ちや、饑饉同様ぢや、だから僧堂では出来るだけ粥をのば

すから飯臺の上には例の如く箸がちやんと行儀正しく列べられて居ても、そりや眞んの儀式的で正しく椀を取りあげたら、たつた一口にどろ／＼ちやまるで上戸が濁酒を呑むよりもまだ見事ちや、そんなあんばいぢやから、彼の宗詮が假令麥でも何んでも正體のある粒飯を落したから、豈に奚んぞ狼狽せざるを得んや、今で話にすれば一場の滑稽ぢやがどうして其時には滑稽どころの騒ぎぢや無かつた、そして其副食物ぢや、主食が箸入らずのどろ／＼的ぢやから、副食物に氣の利いたものがある筈がない。

▲麥糠の味噌汁 之が平時の副食物さ。純麥のどろ／＼の箸入らずに、搗て加へて麥の糠の味噌汁と來ちや、ひよつとすると、先程八釜しかつた、東北三縣の飢饉地以上であつたかも知れぬけれども、其當時の柄等は、之が修行者の常ぢやと觀念して、大聖釋迦牟尼が萬乘の王位を捨て

檀特山で採薪汲水をした聖蹟を思つて精進したから、別に是が爲に苦痛は感ぜなかつたが、當時の有様を神經過敏の新聞記者でも來て見たら、妙心僧堂の飢饉と云ふ見出して、救助米の義捐でも募つて呉れたも知れなかつたて、ア、ア、ア、ハ。

▲茶菓の饗應 或日役僧から今日は大衆に茶菓の饗應があるとの豫告であつたから、平素三國凶歉地の人民の如き柄等は、如何なる御馳走のあることかとグウ／＼喉を鳴らして待つて居ると、時刻が來て出されたものを何ぞと見てみれば、里芋の葉を鹽漬にしたので、夫れを少量づゝ分配されたのだから、大衆一同順々に手の掌を出して、其上に乗せて貰うて、山海の珍味と推し戴いて賞味して、馬の小便見た様な番茶を飲んで、舌鼓を打つて、餓腸を喜ばした。是が此時代に刻せられた好個の紀念で、今に至りて忘却することは出來ぬ。成らう事なら今一度、あん

なうまい茶菓の饗應に與つて見たいと思ふ様なことがある。先づ其時分の僧堂生活と云ふものは斯んなもので、營養の不充分と來ちや非常なものだ。だから今日の科學亡者の學者や書生に言はしたら、衲等は當然肺病か何んか死んで仕舞ねばならぬ。よし死な無つても、到底一人前の智力體力を備へた人間になることは出來ぬ筈だがどうだ當時の雲衲と來ちや腕力で來ても鬼も取り挫ぐ熊坂長範か、魯智深も三舍を避ける程の豪のものがあつて其勢と云ふものは、どろ／＼粥で腹を脹らして、芋ッ葉の茶菓に鼓舌して居ても、肉體の健全と靈的の潑刺と相待つて活々して居たことは、兎ても二十歳前後で度眼鏡かけて、何んとか云ふ油を頭髮にこて塗つて、やれ煩悶だの、やれ苦悶だのと色氣を使つて居る、青書生等の想像し得らるゝ處でない。其證據を云へば現存の▲妙心僧堂で判る。僧堂は衲等が在堂中に大竹箒を開墾して他所よ

り土を運搬して、高さ二間程の地丈を築きあげて、土臺だけ拵へたが、そんな藝當が薄志弱行の青年で出來るか。夫れが一日や二日ではない。着手から成效まで一ケ年もかゝつたが、其間の雲衲は、宛然蟻が根氣よく物を運ぶが如く、日々修行の餘暇にえい／＼遣つたのだ。否えい／＼遣りつゝ修行したのだ。其時分の老師が七十歳の越溪和尚で、其法友が南禪寺の、

▲寶洲老漢だ。此老漢も同じく七十歳の老僧であつたが、妙心僧堂の土運と聞いちや黙つて居られぬとて、七十の老僧が同僧堂の大衆を引卒して自ら土擔の手傳に出掛けた。然らば此老僧は、單に大衆を指揮して事業を監督して居たかと云ふに、決してそんな手ぬるい事ぢやない。手傳に來たお客の寶洲と手傳つて貰ふ主人の越溪の、

▲七十の兩高僧は相棒で以て大畚をさしに擔いで、土満々と盛りあ

げて、大衆に卒先して遣りかけた。七十の老僧已に然り、兩堂の大衆豈に奮起せざるを得んや、何れも満身の精力を惜げなく推し出して、例のえい／＼を始めた。其時の光景と云ふものは、實に懐じきもので、百萬の勁敵も路を開いて通すとても云ひたい勢であつた。其處で越溪和尚が當時の記念にとて、其有様を畫に描いたが、夫れに南禪の寶洲和尚が偈贊を加へた。夫れが今では防州の玉泉寺に傳つて居る。衲は其當時に參加の一人だから、無論始終の顛末を記憶して居るが、衲の外では先づ松島瑞巖寺の薩埵和尚だろ。つまり肉食せねば滋養に成らんとか、纖維の多い菜葉を喫ふと胃の消化を悪くする杯とはなまけもの、贅澤談だ。下ッ腹に全身の力を入れて妄念妄想の邪念を去つて眞正の清淨行を遣りかけて見よ、物質の不足は精神が助けるから、心身共に健全となつて鬼とも引つ組む様な體になるぞ。其位の人間でなくつて、まさかの時に問

にあふか、況んや日本は將來猶ほ世界の強國を相手として、干戈を執つて起たねばならぬ運命を持つて居る、重大責任ある國民ではないか、其國民が、一國の運命を双肩に擔つて干戈を執る場合に、唯一朝の血氣位で最後の勝利が期せらるか、見よ、軍隊で最も忌むべき弱點は、例の慕郷病ぢやと云ふではないか。是は人情として當然だが、如何に當然でも、そんな病氣が盛んに成つたら、兎ても軍隊の士氣は揚らぬぞ。士氣のない軍隊が何んの活動が出来るか、蔚山に砂を嚙んでも、士卒歸志を生ぜざりし當年の清正部下であつてこそ、あの困難な籠城が出来たではないか。次期に來る可きは、到底昔の三韓征伐や日露戦争の比ではあるまい。世界は日露戦争によりて遺憾なく我の實力を試験したから、今度開かざる可き戦争ありとすれば、三十七八年度位のことでは済ますまい。是に至りて、平素に於て定力修養の國民を養成して置く必要があるではない

いか。
 ▲伊深生活 衲が越溪會下に居たは前後四年であつたが一旦壹岐の
 自坊へ歸つて夫から美濃の井深僧堂に詣りて泰龍老師の會下に加つ
 た處が同堂には僧堂づきの田畑が澤山あつて夫れを大衆が毎日耕作
 する日課であつたので雲水兼農夫生活である。今の堺南宗寺の蜻洲和
 尙なんかと來ちや百姓も跣で逃げ出す程の熟練家で在たが衲は生來
 蒲柳の質であるから鎌もてば呼吸が切れる水田に這入れれば蛭に吸は
 れて虫負けをする晴天には土擔ぎ肥料かけ若しくは草刈り繩綯雨天
 なれば草鞋つくりで午前中には是非とも二足宛は編みあげねばならぬ
 規則であつた處が衲が造ると草鞋にはならでまるで毛虫か鍋つかみ
 の様なものにならぬから大衆一同からいつも小言を言はれねば
 ならぬ其處で如何にしても製履の美術に成效せぬから不得止一策を

廻らして製履の上手な奴と同盟を密結して草鞋造りと寫本とを交換
 して誤魔化して居た。まだ其外に困つたは衲は青少時代から嗅感が鋭
 敏であつたと見えて初夏の時分になると必ず草木の新芽を摘み取つ
 て之れを晒らして貯藏して置いて副食物にする例であつたが衲は其
 の時分になると其の臭氣の爲めに頭痛を感じて閉口した其の當時同
 堂に居た中に前年遷化した、
 ▲天龍の峨山 も居たが峨山は生得の腕力家で特に角力自慢であつ
 たから毎時大衆の中の同好者を引連れて昔關山國師が坐禪したと
 云ふ石の有る山に登つて其處で頻りに遣つたが衲は腕力と來ちや上
 述の如き弱虫ぢやから見物にあらざれば行司の役さ處が一日評席の
 留守間に集つて秘密會を開いたが其緊急動議は何ぞと云へば大衆一
 同が大枚三錢五厘の自腹を切つて種々の原料を買収して五目飯を拵

へて、年來の餓腸を醫し様と云ふ動議さ。かう云ふ問題には誰も不賛成のある筈なれば、滿場總起立の勢を以て可決した。其處でまだ出來ぬ前から猫の様に咽喉の鳴る思をして炊きあげて見た處が、さて是を釜から移し取る飯櫃がない。其處で誰の發案であつたか、當意即妙の奇策を案じて、手洗盥を持って來て是の中で、ゴモクを捏ねくつた。手洗とは言へ或る場合には随分足洗にも雑巾洗にも互用され相なる盥である。けれども飢ゑては不淨なき人情の習ひ、殊に萬事に無頓着を主とする雲水等のこととて、誰一人きたないの何のと言も漏すものなく、忽ち阿彌陀圖で以て其全部を遣つ付けて、きよろりとした有様であつた。どうも其時分の事を回想して見ると、實に隆んで有つた、其の大衆中に活潑な處では、峨山の様な腕力家あれば、優美な處では、

▲丹後の宗悦　と云ふ様な、美音自慢があつて、大衆が退屈をした時分

になると、一同を狐鼠々々と山の奥へ連れて往つて、深山の郭公も顔色なしとも評する程の美聲を發して、數番の俗謡を聞かして呉れたのは、實に清淨無垢なる遊戯であつた。斯る境遇の樂と云ふものは、到底凡物の窺ひ知る處でないから、僅か一週二十時間内外の學課に酔うて、其の鬱屈を紅燈斜街の淫樂に散ずる如き、劣等嗜好の學生輩の夢にも想像される處でない處が、此山奥で遣る秘密法樂が、役位の耳に這入つてどえらいお目玉を頂戴したことも度々あつた。雲水の仕事として採薪汲水は、教祖以來の慣例であるから仕方がないが、納等の遣つた時は、一日の規定が六尺四方の薪を作るが任務であつた。柄はつまり斯る虛弱の性質で人並にそんな事を遣つたから、大變な瘡疾に罹つて、大徳寺まで後送された事があつた。處が僧堂生活中こんな事がある程、悲敷事はない、まるで負傷兵士護送も同一だ。

▲豪僧神阿 禪林も次第に零落して来たが、指を屈すれば谷宗もまた同一だ。衲が知つてをる人物でも今までに故人と成つた連中に、今少し歳月をかしてやりたい人が少くない。就中淨土宗の老僧寺町聖光寺住職神阿和尚は、真に一世の豪僧として稱へるに差支のない人物であつたが、衲は此老僧の機嫌を取つて、講釋を聽聞したから、略ぼ此人の面貌を記憶して居る。丁度衲が建仁の兩足院に居た時だから、今から計上して二十餘年前だが、當時此神阿和尚が六十歳であつた處が、此老漢中々學者で、而も一種のねぢけ爺と聞いたから、一番其ねぢけ爺の講釋を聽聞して見よと思つて遣つて往た處が問答は左の如く開かれた。曰く、

▲宗旨は如何。フ、禪宗か。禪坊主が此處へ何しに來た。なに教相を研究したいから。四教儀の講釋を頼む。をかしな注文する坊主ぢや、お前禪宗なら何故華嚴を遣らぬ。禪は華嚴から出てをるではないかと、茲に

至りて衲は、

▲お臍で茶が沸く。の想ひをしたので、禪が華嚴から出て堪るか。老僧何を血迷ふたぞと、一棒を報いたかつたが、いやさて今日は喧嘩に來たのではない。講釋を頼みに來た。其初志を忘却しては相成らぬと、奥齒の中で笑を噛み殺して、唯々諾々でをると、神阿老漢益々大氣焔だ。曰く、四教儀はいかぬ。是非華嚴から遣れ。華嚴を遣るには起信論から始めるが結構だ。だからお前遣つて見るなら、起信論から始めて遣らう。全體

▲禪宗坊主は小腹だ。だから我が淨門の十萬億土杯と云ふと、其小さい腹へはよう這入らさぬのだ。お前も坐禪するなら、そんな小ッ腹の禪坊主をまねずに、太ッ腹を存分脹らして置け。腹が太いと十萬億土でも百萬億土でも何でも入るぞ。あれが宗旨でも小ッ腹の奴が澤山あるから、誠に困る。先づ第一儒教坊主の徹底なんかと來ちや、始末におへぬ小

腹漢ぢやあんなものが幅を利かす世の中ぢやから今でも己れが死んでみよ

▲淨土宗は滅茶苦茶だつまり淨土宗中真正の坊主は斯く云ふ神阿より外にないのだと氣焔實に萬丈時に衲と同時に初見參せし眞宗僧ありしが神阿和尚は是まで衲に吹きかけし餘沫を其眞宗僧に回轉して曰くなに貴様は眞宗ぢやとナ眞宗と云へば其開山は親鸞だが一體親鸞と云ふ人物は墮落坊主だ夫れを今から何とか斯とか辯護するは後世の曲庇ぢやとて是にも薄の穂にも似たる罵倒を試み更に論鋒を當時の京都府知事たる榎村正直に向けて曰く榎村と云ふ男は小賢敷男だが併し此の男は全體京都に居ながら此寺町の聖光寺に神阿のあゝることを知らぬだから此頃面會をした時かう一棒を與へた曰く卿は是れ京都府知事たり知事は府民の父にあらずや然るに卿は

▲緇門の内に絶世の顧問あるを知らずや此人知識衆に優れ天晴れ府父の顧問たるに足る卿若し東京に到り大臣參議に會せば彼等は必ず云はん京都には高僧神阿なるものあり此高僧よろしく戴いて以て政事の顧問とすべしとだから卿は廻り遠く東京へ行つて此忠告を受くるまでもなく今後は此の老僧に就いて府政上の意見を聴く可しと言つて遣つたら何と感じたか其以來は榎村正直ヒョコくと己の處へ相談に遣つて呉るさうなるとあんな男でも可愛らしいから問ひに任かせて教へてやるのだだから彼れも己れを師の如く崇めて弟子の禮を取つて來るあれも利巧な男で己の處へ來ると損をせぬから頻りに來るのだ

六十、家訓

一莖の稻に能く數合の實を登らすは、其の根長く、其株大いにして、其穗思ふが儘に成熟すればなり。一本の木に能く數斗の果を結ぶは、其の根深く、其の幹太くして、其の枝思ふが儘に繁茂すればなり。然らば世に未だ其の根淺くして、其の枝の繁りし實事を聞かず、其の本弱くして、其の末の榮えし實物を見ざるなり。

恭く惟るに神佛は吾が心の根本なり。帝王は吾が國の根本なり。祖先是吾が家の根本なり。父母は吾が身の根本なり。之を人世の四本と云ふ。如何となれば世に未だ神佛なくして心先づ在りし例を聞かず、帝王なくして國先づ建ちし例を聞かず、祖先なくして家先づ興りし例を聞かず、父母なくして身先づ生ぜし例を聞かざればなり。されば此の身の發達を得んと思はば、父母の心を孝養するより善きはなく、此の家の繁榮を得んと思はば、祖先の志を發揚するより善きはなく、此の國の隆盛を

得んと思はば、帝王の掟を遵奉するより善きはなく、此の心の安樂を得んと思はば、神佛の教に隨順するより善きはなし。如何となれば、神佛は吾等の福德圓滿を守らせ玉ふの外、更に他の願ひおはしまさず、祖先は吾等が家運繁榮を祈らせ玉ふの外、更に他の望みおはしまさず、父母は吾等が富貴利達を願はせ玉ふの外、更に他の望みおはしまさざればなり。然るに時移り世降りて、往々父母を疎略にし、祖先を輕蔑し、帝王に不深切にし、神佛に不歸依にして、己れが才智利口を頼み、唯々眼前の利欲便益に迷ひ、特に吾が家門の幸福、身心の安樂をのみ求むる者あり、是れ恰も根を截り、枝を損じて、其の豊熟を望み、本を斷ち、幹を傷めて、其の果の多獲を求むるが如し。世豈かゝる道理あらんや。

熟々世の産を破り家を覆したる人を視るに、大抵世智學才あり、見識議論あり、人物中々發明なり、唯々祖先の遺澤に依りて、安心氣樂の人と

なりし故に自から自慢高慢の心あり。又祖先の艱難を知らざるが故に、爰に氣隨氣儘の癖あり。此の氣隨氣儘の癖は、やがて疖癢を養成して、一家一門の和合を破り、自慢高慢の心は、即ち己惚を増長して先達先輩の教誡を侮り、益々己れが才智利口に矜るが故に、或は色欲に、或は物好に大金を消費して顧みず、親族知友之が忠告を進れば、其れは固陋卑劣の輩が舊弊理窟の言草なりと冷笑して省みず、愈々思ふ存分に振り廻す。故に茲に始めて會計の不足を生ず。されど吾が平生の才智を奮ふは此の時なりと氣取り、百方計畫して、頻りに一攫千金の思案を運らす。然りと雖も、未だ曾て一度も實地の事業に就て、實際の經驗を経たることなれば、其思案工夫する處悉く皆壘の上の水練ならざるはなし。されば佞人奸者此の機に投じて、其の計畫に預り、始は少しく利益を見せ、終に大いに失敗を取らせ、未だ數年を出でざるに、早く已に身代顛覆の兆候

を顯す。されど之が外聞を憚り、密に負債を起して其の穴を埋め、何か巨大の利益を占めて、前損を一時に恢復せんと思へども、元來此の人、目上の人に親炙して、其の誨を聽くことを欲せず、常に目下の輩を昵近にして、我意を行ふことを好むが故に、惡魔忽ち便を得て、之に一攫万金の策を持ち込めば、大いに喜んで思へらく、世に百戰百勝とはかゝる事をや、云ふならんと、及ばん限り大金を投じて、思ふ存分深入すれば、忽ち一敗地に塗れて、又取收めん手段もなし、其の形迹は、最早世間に暴露して包み隠さん様もなければ、止むを得ず事情を明かして、是を親族の會議に問ふと雖も、事茲に至つては、如何とも救ふべき道なし。されば書畫骨董珍器什物を賣却して、不動産の幾分を存するの外なしとの決議に任せ、商人をして其の價を積らしむれば、積る處の價は買ひし時の半額にも當らず、因て之を抵當として、又亦甲より新借を起し、是を乙丙丁の舊借の

禪機
内入とし、百万遺繰して一時を彌縫すと雖も、負債は雪を轉すが如く、忽ち巨大の額に登り、督促は箭の射るが如く、四方の鏃一身に集り來て、今は片時も遁るべき術なし。是に於てか憐むべし、祖先の膏血を絞りて蓄積せられし動産不動産を擧げて他人の手に分付し、父母妻子と共に破家散宅の客となりて、流離困厄の憂苦を受くることを悟らず、天を怨み人を咎め、時を怒り世を詫ち、終に神経病を發し、恨みを含んで地に入るの鬼となる。又其の無氣力なるものは、義理を捨て恥辱を忘れ、所謂蛙の面に水馬の耳に風の人となりて、生きながら禽獸の群に入る。嗚呼斯の如く人の義務を棄て、世に損耗を流せし人は、管に今生の苦惱を受くるのみならず、來生の苦患も又決して免るること能はざるべし。嗚呼祖先の靈が生々世々の悲歎思ひやるさへ氣の毒なり、如何に惡むべき人非人にあらずや。

又世の産を殖し家を興すものを視るに、強ち學識才辨あるにあらず、人物野卑に似たりと雖も、唯内に省み己を見るの眼力を具へたり。されば吾が今日の徳は、能く是れ程の福分を受くるに足るや否や、吾が今日の働きは、能く是程の財産を有するに當るや否やを省み察して、日々夜々に徳を修め、行ひを勵ますことを怠らず、第一に我儘を戒め、第二に奢侈を禁じ、第三に堪忍強く、第四に勉強高くして、萬事に窮屈なり、面倒なりと、思ふ念を抱かず、天道の働きを恐れて、心を放ち身を縦にせず、因果の道理を信じて、己れを責めて人を苦めず、吾身不肖なるを能く知るが故に、先輩に謙り驕る心なく、吾が智の不明なるを能く悟るが故に、目下に問ふに恥づる氣なし。况して祖先の艱難を思うては、吾が勤勞の及ばざるを慚ぢ、聖賢の教を聞いては、吾が心術の不明なるを愧づるをや。我意を除きて、家内を和合し、便宜を與へて、雇人を使役す、他の惡事を聞え

ては隱密に説諭す。君國の恩に報る爲めには、財を喜捨して吝嗇なることなく、神佛の教を奉ずる爲めには、心を正直にして表裏にすることなし。又常に慈善の心あるが故に、人の危急を見ては之を救ふに猶豫することなく、平生念願力に富むが故に、事の困難に當りては之を耐へて退轉することなし。凡そ斯の如くにして才能あるものは、必ず能く家を起し産を殖し、父母の名を顯はし、子孫の榮を貽すものなり。縦ひ才能なきものと雖も、苟くも斯の心得あるものは、必ず能く前代の遺産を維持して之を後業に傳へ、子孫永々其の福利を受けて、祖先の精神を長く失墜せざらしむるものなり。如何に愛すべき孝行者にあらずや、如何に頼母しき篤實者にあらずや。

偕て此の産を殖し家を興す人は、先づ己れが踏立たる現存の脚下に能く氣を着けて、一步々々丈夫に向うへ進み行くものなり。之を重厚篤

實の人と云ふ。彼の産を破り家を覆す人は、先づ向うへ己れが望みの目的を立て、其の目的に飛び附んとて、脚下已に空に浮きたるものなり。之を輕躁浮薄の人と云ふ。重厚篤實の人と斯の如く反別するは、何に因て然るか。と云ふに、前生の宿習に因るべけれども、亦是れ幼少の習ひ、終に能く其の性となりしもの多きに因る。諺に三つ子の心百までと云ふは、正に此の事を證明したるものなり。幼少の時父母が家庭の教育は、實に其の子其の家の盛衰榮枯、苦樂安危の由て岐るゝ處、爰に婦人たるものは、志少く見卑うして、動もすれば小慈小愛に流れ易し。故に宜しく人の根本を懇諭薫誨すべし。人の根本とは、凡そ神佛と帝王と祖先と父母となり。此の根本を知て恩義を重じ冥加を恐るゝ人を、重厚篤實の人と云ふ。重厚篤實の人にして、未だ曾て一人も産を殖し家を興さざる者なし。又此の根本を忘れて、恩義を辨へず、冥加を思はざる人之を輕躁浮

薄の人と云ふ。輕躁浮薄の人にして家を覆さざるはなし、深く戒め恐れざるべけんや。

以上記する處、數年實地に經驗し來る處にして、之を天地に建て、之を神佛に質して、謬りなきものぞかし。爰に吾が家は、何世の祖先が恭敬儉約、勤勉、勞苦の四行を勵まし、神佛帝王祖先父母の四本を重んじ、産を殖し家を興されしより、以來、今に何世其の間幸にして、未だ曾て一人も輕躁浮薄の者を出さず。是を以て一家和合し、一族繁榮して、子孫世々安宜幸福の賜を受くる。是れ皆神佛の冥加、帝王の保護にして、亦是れ祖先の餘慶、父母の遺徳に依らざるはなし。如何となれば、神佛に不歸依なる者は、多くは冥加に見放され、帝王に不深切なる者は、多くは長上に見捨られ、父母に不孝なるものは、多くは子孫に不孝にせられ、世間に無慈悲なるものは、多くは他に邪魔せられて、己れが他を苦しめし丈けは、必ず他

に苦しめらるゝは、因果必然の道理なればなり。況んや斯る人は謂ゆる稻の根を截り、株を損し、木の本を斷ち、幹を傷むるものにして、即ち必ず産を破り、家を覆すものなるをや。若し吾が一家一族にかゝる輕躁浮薄なるものを、出さば、是我が一家一族滅亡の時節到來せりと知りて、懇々説諭を加ふべし。而して其の心底を改めざる者は、早く除族し、祖先の靈を安んずべし。又吾が一族の婦人たるものは、其の子の幼少の時より、上に擧げたる重篤篤實のものに育て上げん事を勤めて、上に記せし輕躁浮薄の氣風は、痛く戒め、斥くべし。若し夫れ父母の申し付けに、是れは窮屈なり、而倒なりと云ふが如き念慮を起さば、是れ即ち我儘氣儘の萌芽なりと知りて、禍の根を二葉の時に斷ち盡すべし。我が祖先が、後來の子々孫々に、破家散宅の客となりて、流離因厄の憂目を見せず、永く家運繁榮の中に在りて、富貴利達の幸福を與へんものとの遺志を繼ぎ、爰に此

禪機
二四八
の家訓を制定す。されば堅く此の家訓を守りて、永世失墜せず、勤勉事に従ひ、此の家訓を後葉に傳へん者は、我家の孝子順孫にして、天地の間に生れ、甲斐ある萬物の靈長なり。若し此家訓を忘れて、一心決定せず、怠惰身を謬り、此の家訓を失墜せし者は、吾が家の不孝者、不順者にして、天地の間に活き、甲斐なき人、非人と知るべし。穴賢。

參禪餘錄

一、坐禪の俳味

菰 堂

默雷和尚より、趙州無字の公案を授かつて來て、草庵で坐禪を始めた。先づ左の足を以て、右の足を壓すだけの半伽趺坐と云ふ奴で、丁度運坐の時、沈吟の體である。見て居る細君がクツ／＼と笑ひ出した。俳句が美を直覺するやうに、坐禪は眞を直覺するのだなと、すぐ理窟に陥つて、肝腎の無字が留守となる。なか／＼趙州の心地に入れない。眼を閉づれば、黒山の鬼窟目を開けば、オイ小兒が洋燈に行當るぢやないか。玉露一杯入れてお呉れなど、什麼しても人間を脱却出來ない。羅

坐禪の俳味

漢にも菩薩にもなり切れない。

三日目に、默雷和尚を訪うて答案を示すと、和尚は手を拍て笑つて、答案を新聞の原稿用紙に書いて来たのか、これは白雲萬里ぢや、禪は活きて居る、死んだ文章では駄目だ、若し文章で事が済むなら、禪學の通信教授が出来る、併し當らずと雖も、遠からずぢや、向上の一路得て居るが、未だこんな事では衲が一拶を加へたら、屁古垂れる、もつと確乎工夫して來いと喝破せられた。

又數日經て、今度こそは和尚を回さうと出懸けた。此日は秋雨が芙蓉の花にそぼ降つて、心地が何となく清々しい、庵室へ通ると、柱の拂子に秋の蠅が止つて、清癯鶴の如き和尚が爐邊に靜坐して居られる。瓶に秋草が挿してあるので、老師は花がお好きですかと尋ねると、花が無いと淋しいからナ、衲は朱紅や濃紫の西洋花は嫌ひぢやと答へられる。それ

から少焉沈黙を守つて居ると、公案は什麼だ、と口を切られる。一寸答辭に窮して居ると、黙つて居るのかと云はれる。いゝ、泰山となつて北斗を望むやうに思ひますと答へると、其思ふと思ふものは何ぢやと、一拶を加へられる。それが即ち佛性でせうと云ふと、そんならそれを把握して來いと云はれる。いや自分では把握して居る積りだが、と思つて居ると、和尚は一指を高く擧げて、これが解るかいと云はれる。解ります無！
—即ち佛性を指してゐるのでせう、杓頭を指してゐるのでせうと答へると、左様だ、杓頭とは面白いな、杓頭だと云はれる。私は小兒の時、黄檗へ遊びに行つた、其臺所に「意注杓頭」と木庵の軸が掛けてあつたのを覚えて居る、それで答へたのですと云ふと、能う覚えて居たナと、恰で慈父が愛兒の智慧を喜ぶ口調だ。

「意注杓頭」とは面白い、衲が黄檗へ行つたら一度讀んで來よう、昔時雪

峰は杓子と箆を持つて歩いて、到處の僧堂で佗の嫌がる典座の役を勤めて回つた。或時飯を焚いて居ると、湯氣の中から文珠が現はれた。これは十二天から悪魔が降つて、雪峰を試練したのだと言傳へて居る。すると雪峰は杓子を以て去れ、と文珠を撲つた。又後に雪峰は其僧堂を董して、三百の雲水、此杓頭より救ひ用ひ來るとか云うて居る。意注杓頭も此意味が含んで居るのぢやらうと話される。

芭蕉の古池の句に、禪味があるとの事ですが、其解釋を叩くと、衲は俳句は知らぬが、これは無字關を通つた時の句らしいナ、空々寂々ぢや、併し文字通りの空々寂々ぢやないよ、眞空だと説明せられる。昨夜雲水達が大聲で讀經せられて居たのは何ですと問ふと、あれは大般若を轉讀して居たのぢや、大般若六百卷は空の一字を説いたもので、衲が雜僧の時師匠から解らぬ字があつたら空と讀んで置けと教へられたこと

があると話される。爐邊で薄茶を立て、これは衲が作つた茶碗ぢやと前へ置れる。喫了して茶碗の裏を見ると、自知と銘がある。それは冷暖自知の自知ぢや、アハ、未だ蟬脱出來て居ないもつと自知して來いと云はれる。余は成程禪味には俳味があるなと思つた。

二、草庵の禪趣

僕は建仁寺塔頭の棲雲閣と云ふ古寺に間借して居る。北の庭面に梅の木が三本あつたが、一本は舊時分に花屋へ賣られて、残りの二本に此頃毎朝々々雀が啼いて居る。雀よりも鶯が來て啼きさうなものだが如何したのか。此梅の木は二本とも雀に占領せられて居る。障子を開けて廻縁へ出ると、逕を挟んで僧堂の庭も覗ける。赤椿が簇々と咲いて、時々雲水達が梯子をかけて、其花椿を剪んで居るを見る。

梯子かけて椿剪る僧塀の上

僧堂の起床は、午前三時頃である。一番初めに太鼓の縁を叩いて一山大衆の夢を驚かすのだ。それから魚板が鳴る。なぜ魚板を鳴らすかと云ふと、魚の眼は夜中でも明かにあいて居る、それで魚板を打つて僧の眠を覺すのださうナ。

春眠曉を覺えざるに魚板鳴る

雲水達の就眠は、午後九時頃である。就眠と云つても、禪堂で居睡する位のことださうナ。此時もガン／＼と魚板が鳴ると、大衆が一同讀經をする。一人聲の美しい坊さんがあるので、聴けば黄檗から來て居る雲水とのことだ。此時分になると、僕の娘もいつも眠たさにむづがる。それ坊さんがよく泣く／＼とお經を讀んで居やはるぞと云ふと、すぐ泣き止んで、ほんによく泣く／＼と云うて居やはるとして、機嫌が直る。左様聞く

と左様聞える。

泣聲にお經さかゝる涅槃像

古寺の門を出ると、一面の藪だ。此藪の中に梅雪村の墓があるやうなが、未だ一度も展墓したことはない。此頃此藪の向うの藪が少し拓けたので、此邊も少し明かるくなつた。併し尙千竿の綠竹が生茂つて居る。僕は朝夕出社と退社の途中、此藪へ石を投げるのを日課にして居る。面白い。カッチ玉の音を發する。鳳鳴とはこんな聲かと思ふ。心地が好い。これは香嚴擊竹の公案三昧になるためだ。昨今竹間に白梅が匂うて、石を打つと早や散りがてにちら／＼。

白梅の雪に降りけれ春の雨

建仁寺の鴉、これは名物だけに朝夕々々の喧しさ、鶯や雀の聲などはこれに壓倒せられてしばらく鴉の天地だ。仰山な鴉だなど、大空を眺め

て歸る時藪の逕で出逢ふ黒い法衣の雲水達までを、おや大きな鴉だなと思ふ事がある。

白梅に鴉がとまる禪寺かな

此枯木寒巖的の物寂びた建仁寺境内で、萬綠叢中紅一點の趣きのあ
るのは、時々極彩色の祇園の舞妓などが通行することだ。此れは毘沙門
や摩利支天へ參詣するので、此の舞妓を見て、此たゞ真中が僕だなど、其
中を摺れ違うて通るのがなか／＼面白い。

僧通り舞妓も通る涅槃の日

三、花 畠

「僕の間借して居る禪寺の庭には、花が乏しいので淋しい。一つ花畠で
も作りたいたいと思つて居る所へ、西洋花の種子を幾袋も貰つたので、丁度

先月のお彼岸の前日ぢや、隣から鋤を借つて来て、朝早く庭の土を掘り
起した。寺の事ぢやから、此下から昔の罽毘でもひよこりと出るかも知
れんなと思ひつつ、掘り起して居ると、茶の大黒頭巾を被つた隣の坊さ
んが、花畠が出来ますかナと態々見に来られる。鈴付けた狛がついて來
る、納もあ手傳ひしませうと、又別の鋤を持つて来て、土を掘り返して呉
れられる。此坊さんは大佛に居られた時、西洋花を畠一ぱいに作られた
経験があるとの事ぢや、僕の鋤の先が飛んだので、水に濡らしてお箆め
なさいと教へて呉られる。親切な坊さんぢや。

ちやんと短冊形の花畠が出来た、嬉しい。嬉しいので早や花の種袋を
縁先へ取出して來た。紫の夕顔もある、白の夕顔もある。併しこれはお彼
岸に播くのは早い。孔雀草、金魚草は、名からして美しさうぢや。紫、白、絞
りの花葵、麝香すみれ、金蓮花、金蓮花は、或西洋人の庭で見た事のある、美

しい花ぢやがナなどと想ひ起して、秋咲きの分ばかりを撰つて播き付けた。其西洋人は、花壇を星の形に作つて居た。

種を播く暇に見るや花卉百圖

袋の花卉の圖を眺めては、今播いた種が今すぐ花が咲くといふなどと思ふ。丁度播き付けたのが、月見草、錦葉、雞頭、美女、撫子、千鳥草、水蝶花等二十餘種ばかりぢや。牡丹、罌粟の種は、顕微鏡下ぢやなければ解らぬほどの小さくである。播き了つてから一服吸うと、卷蕒のそれも、チエリ一の旨味さと云つたら、併しこんな花畠を拵へて置いて、花の咲く時分に宿替へでも申し付かつたら、何もならんと人間はすぐにこんなつまらぬ事迄を心配する動物ぢや。

花畠が出来てから、毎朝々々早く起きて、一度苗が出たか出ぬかを檢分せねば氣が済まぬ。小兒にこゝを踏む事はならんぞと嚴命して置い

ても時々知らぬ間に小さい下駄の跡が印せられてある。誰が踏んだのぢやと小兒を叱りつゝ、小石の下にでもチヨと青いのが見えると、早や苗が出て居るのやないか知らと、小供も忘れて仕舞ふ。此花畠の上に、雨曇晴など測候所の天氣豫報を日々氣にするやうになつた。

昨今庭の緋桃も散り盡して、木芽の緑が夥しく噴き出して居る。隣の坊さんも矢張り氣になると見えて、時々見に来られる。花畠には一面に二葉の縁が見え出した。孟子の所謂苗を助けたいと云ふやうな心が起る。葵の二葉も露ほどの小さく、孔雀草の二葉は、赤味がかつて居る。金魚草も出た。千鳥草も出た。金蓮花の苗は、一本早や一寸ばかり伸びた。一番多いのが牡丹、罌粟、少いのが月見草、全く出ないのは翠菊と黄紅咲分けの雞頭。斯う日々二葉の花の苗を見て居る樂しさと云つたら、刺繡の薔薇を縫うて居る細君も、ゴムの風船玉を玩弄んで居る小供も、窺ひ知

らぬ樂しさである。

此庭に、天を摩する松の大木が一本ある。毎朝々々梢に鶯が止つて首のない鮒や鼠の臙腑を、此花鳥の上へ落しよる。此間の如きは、猫の頭らしいものを落しよつた氣持悪さ、此花鳥を保護する策として、一つ鶯を捕てやらうかと思ひ付いた。これは同人古愚子の智慧を借つて、小さな壺へ金魚を入れて、松の下へ置いて行く、すると松の稍から鶯が壺の金魚を見付けて獲りに下りる。壺へ這入る時は、スーと羽根をすぼめて這入るが、壺の中を出る時は、壺の中で羽根を擴げて居るから、バタ／＼と能う出ない。そこを引捕へて、其鶯を動物園へでも寄附しやうと云ふ名案ぢやが、未だ實行はして居ない、いづれ獲れたら、寫生文の好材料である。

物落す鶯獲る沙汰や花の苗

四、齋の日

正月齋の日は、僕の家庭で最も記念すべき吉日であつた。それは僕に取りては、玉よりも嬉しい長男を得たからで、これは其の日記の一節である。

お腹が痛むとて呼び覺されたのは、丁度枕時計が午前四時を示す頃で、此時は神佛よりも産婆が力であつた。あたふた家紋の付いた古提灯を點すなどして、草庵を走り出た。大空には、無数の星が夜の海のやうにきらりきらりと輝いて、町へ出ると警邏の巡査にも出逢はぬ淋しさだ。産婆の家を探すと、葬ひの駕屋の眞向ひで、偶然とは云へ、人生の涙と笑を説明して居る心地がする。産婆はゆつくり褰衣を着替へなどして來た。産婆を、一臺出逢うた辻車に乗せて先へ走らせた男か女か、安産か難

産か嬉しいやうな恐しいやうな心地がする。なに人力で如何ともする
 事の出来なないものだ。と諦めてもすぐ氣になる。途中一軒に聲を懸けて
 置いて草庵へ戻ると未だくのとのこと。それ産湯を沸せ、それ齋粥を炊
 けと、それはく忙しいこと。未だ暇が取れませうと、斯る中にも火鉢を
 擁して、こくりく坐睡を始むる産婆の膽玉には驚いた。懸て座敷の障
 子がほのく和白み出した。お腹が一頻りく痛みまざるげ。建仁寺
 の森に明烏が啼き出した。未だ産聲が聴えぬ早や東山に茜が射し初め
 たので、僕と産婆と産婦が宵の程に離して置いた齋粥を祝ふ郵便――
 と抛込んで行つた。風の繪を描いた年賀のはがきだ。縁喜がい、男兒が
 産まれる吉兆だ。なと思ふ。母の許より安産の守護にとて、鹽竈大明神の
 掛軸を持參して呉れた。掛けて見ると、御神影は二體で、男尊一體は鍋を
 冠り、女尊一體は釜を冠つて、其上に七難即滅、七福即生とある。鍋釜を冠

る神様とはなか／＼俳味がある。

一人二人女達が手傳ひに見える。産婦の傍に、夫は居らぬものだ。の
 こと、成程居てもこれほど手持無沙汰のことはない。産室を窺はぬのは、
 神代の遺風など、理窟を付けて草庵を出る。默雷老師を訪ねて茶話を
 する。佛説には、父母の血を紅白の芍薬に譬へてある。小兒は其芍薬の花
 から産れるのである。出産は天地間の一大不思議であるとの話も出る。
 一時間ほど経て草庵へ歸ると、門口から呱呱の聲が聞えて、庭の梅の下
 に産湯の盥が据ゑてある。手傳ひの女達が皆々聲を揃へて、御安産でお
 芽出たらう。ムリますと祝詞を述べる。見ると、赤い／＼小さい／＼男兒だ。
 鼻と眼が僕に背て居るとのことだ。あゝ我志未だ達せず、早く已に長男
 を得た。此嬰兒に對しても、忸怩たらざるを得ないのである。

長女は奈良で孕んだので、彼の左近の橋の子に因んで橋子と命名し

たが此長男は、御題にあやかりて、松男と命名しやうなど、相談をする。人生小兒の父母となつて、初めて家庭の眞趣を解するので、新婚一二年の家庭の如きは、花はあり實はないのであると云ひたくなる。嬰兒を得て初めて、人間の不思議な動物なのを知る。嬰兒は我兒に違ひない、されど一面天の兒であるとの感が生ずる。即ち父母は人類と國家と祖先の爲に、此嬰兒を養育すべきもので、父母は決して父母自身の爲に、我子に至孝を強ふべき權利はない。生涯我子の爲に苦むを喜びとせねばならぬなどと思ふ併しこれは、唯だ父母としての感想で、人の子として父母に至孝なるべきは、勿論である。嬉しまぐれ、色々の感想を、花梓を巻いた日誌に書いて付けて、

男の子齋囉す中に生れけり

五、なかぬ人形

僕にことし四才の小娘がある。なか／＼好う舌が廻る。早や此頃は、姉様氣取りになつて、人形ちやん買うてナ／＼とせがむで居た處へ、正月の朝、其弟に當る嬰兒が、ホギヤア／＼と生れたので、あゝ小さい人形ちやんや／＼と差覗いて、頬舐して喜んで居た。しかし母親が、嬰兒の添乳や襦袢がへに手を取られて、其後は一向姉娘の面倒を見て呉れぬやうになつたので、時々執拗て、此人形ちやん抛つておしまいナ、もつと泣かぬ人形ちやん買うてななど言出すかと思へば、抱こ／＼と蒼蠅いほど母親の懷中なる嬰兒に纏ひ付く。

それ泣いたとは、此春寒に炬燵からしば／＼抱き上げたゝめか、此人形ちやんが不圖インフルエンザに罹つた。早うお醫者に診せよと紫

の肩掛の内、あたゝかく母親が抱いて、僕も姉嬢も付添ふと云ふ總が、
 りで、あたふたお醫者へ連れて行つた。お醫者は聴診器を人形ちゃん
 胸へ當て、しばらく診察して居たが、聽て絶望！と云ふむづかしい顔付
 をして、これはなか／＼危篤の症状です。餘り抱いて門を歩いては不可
 ません。早くお宅へ歸つて十分あたゝめてお上げなさい。勿論天壽と病
 氣は別です。看護次第で助からぬとも斷言出来ませんが、御注意なさい。
 と云ふ。青天の霹靂とは此の事だ。たゞ假初の涕垂れ風邪と思つて居た
 に、早や危篤の症状かと、僕よりも母親がはら／＼と熱涙を人形ちゃん
 の顔へ溢す。

僕は或は誤診ぢやないかと疑ふ。姉嬢は雀はチユ／＼鴉はカアカア
 と啼いて居ると、唱歌を唄つて居る鴉はカア／＼が縁喜が悪いと氣に
 なる。人間は愚なものだ。

さあ一時間ほど前まで春風靄々の家庭も、俄かに蕭殺の氣が満々だ。
 見舞人が出て来る。お可愛さうに若い夫婦はこんな事に氣が付かぬで
 困る。もつと早う病氣が解りさうなもの。手遅れぢやらうなど驚いて、駈
 付けて来た嫁の姑が云ふ。藥を服ます受け付けたとて喜ぶ。乳を呑まぬ
 とて心配する。僕は湯婆と炬燵とで温めて遣れ。醫者が云うて居た室内
 の溫度を六十度位にせねば不可んと喚く。人形ちゃんは靜に沈睡する
 やうだ。母親は絶えずさあお乳お乳と搖起す。いかに泣かぬ人形のや
 うになつた。午からお醫者が車を走らして見舞うて呉れた。僕が送つて
 出ると、小聲で而も力ある聲で、御注意なさい！と云ふ。あゝ死の宣告だ。
 それにしても餘りに儂い春の夜の夢よりも儂い。何の爲に生れて来た
 のか、餘りに脆い花の蕾よりも脆い。此親の愛の力が、此の病を救ふこと
 は出来ぬか。天の一方より絶大の威力が此嬰兒の上に加はつて欲し

い。天の靈藥が庭の樹に降りかゝつて居ないか、それにしても早く醫藥の効驗が現はれさうなものだと、枕頭を去らず看護をする。ホギヤアと一聲泣いた、やれ嬉しい藥能が見えたのだ、早く／＼と乳を吞ます。一口吸付いて再び沈睡に陥る、あゝ鳥の將に死なんとする、其聲悲し、これが最後の泣聲であつた、父母への告別であつた、あゝ僕の最愛の嬰兒は、人生に在る僅かに三十日にして永眠したのだ、いや未だ呼吸がある、脈搏があるなど、思ひ返す、思ひ返しても、彼れは遂に泣かぬ人形となつて、母親の腕に抱かれつゝ、靜かに永眠するのである、あゝ寢顔に浮びし微笑の漣は、今はた何處へ消えたのであらうか。

千代までと祈ればこそ、松男と命名したのだ、誰れが今松露孩子との戒名と變ることを知らう、柩には僕と妻とが、梅の花を入れてやつた、それは永眠の前日、妻が襦袢を仕かへやる時、瓶に活けありし梅花を眺め

て居たとのことで、これ僕に似て、俳句を詠む心があつたのであらうと思はれたからだ、あゝこんな人形ちやんを此儘火葬にするのは惜しい、慘酷だ、ミイラとしていつまでも保存して置きたかつた。

悔みに來た或友人曰く、なに病氣に罹つたりして脆くも死ぬやうな弱い嬰兒は、惜しくないぢやないか、病氣しても醫者にかけず、スバルタ的に養育して、而も健全な嬰兒でなけりや、未頼母しくないと、僕も此一語に勵まされて、さうだと涙を揮つた、しかし妻は未だに思出しては泣いて居る。

惜まるゝ、雛箱ほどの柩かな

六、出 産

僕は去年の正月、而もめでたい齋の日の朝方に、小さい男の兒を得た。

乃ち齋の日は昔なら大宮人が小松を引いて遊ぶ日に當るのと勅題が
 丁度新年の松であつたので名を松男と命じて喜んで居た處が其喜び
 は春の夜の夢よりも儂く松男は僅かに一月此の世でホギヤアくと
 啼いて居たばかり遂に假初の病が重つて市松人形のやうな亡骸を籠
 箱のやうな柩の中に残して翌月の十日あまりに死んで仕舞うた其の
 時僕はつくづく思つた斯兒は何が故に此の世へ生れ落ちたのか唯だ
 ホギヤアくとのみ啼きに來たのかさるにても餘りに脆き運命なら
 ずや抑も人間に定まりし天職といふものありやなしやあはれ斯の兒
 の天職は唯だホギヤアとの啼聲にて盡くされしにやと茫然として
 雛よりも美しかりし亡骸を如何にしても茶毘の燵の裡に送るに忍び
 なかつた。

斯くて桃の花も残りなう散り失せ池の菖蒲紫の蓄の筆を抽んぜし

頃、又もや僕の妻は懐妊した菖蒲の紫の筆を見て懐妊したのは貧文士
 の兒としては誠に吉兆である妻は先に逝きし兒の再び宿りしものな
 らんと信じて居る此の信仰愚に似たれども亦憐れで一度愛兒を失ひ
 し世の母は皆なさこそと察せらるゝであらう。

處が不思議や先に逝きし兒の出産せし齋正月丁度ことしの齋正月
 の宵の程より又もや僕の妻は産氣付いた未だ東西も知らぬ此の名古
 屋の旅の空僕は努めて氣海を丹田に沈めやうとしても妻を懐胎せし
 めし夫の人情としていかに周章ざらんと欲するも得なかつた。

夜半産婆の家に走つたのは僕だ此の時は産婆が神佛よりも尊く思
 はれる産婆はすぐに參りますとどんなお鹽梅ですかと云ふ却々落着い
 たものだ、最う産れそうですと答へて走せ歸る間も心配だこんな事な
 ら最初から妻を持たぬがいゝと心で心が叱り付ける。

妻は頻りに産付く。此の時堂々たる大丈夫も、如何とも詮術がない。又家を走せ出やうとすると、若い産婆さん(特にさんの敬稱を奉る)は提灯を點して夜半の霜を踏んで来て來れた。見ると色の白い束髪に結うた新派の産婆さんだ。すぐに白い消毒衣を着けて、室に這入る。僕は一間の座敷に襖を隔て、安産を祈る妻が唸ると僕も唸る。妻が氣張ると僕も氣張る。こゝ即ち那翁の所謂最後の五分間だ。辛抱が大事だと思つて居るとどこやらでコカコツコと鶏が歌ふ。ほのくと障子は白む。ホギヤア〜と産聲が聽える。僕は飛び立つほど嬉しくなる。

さあ盥に湯を取れと、産婆さんが命令を下す。湯をとる。水を汲めと命令する。水を汲む。漸と用事を済まして、産室を覗くと、赤兒は産婆さんの手に抱かれて居る。妻は安らかに臥床して居る。母子共に健全だ。あめてとう男さんですよ」と産婆さんが云ふ。見ると先に逝つた兒と面影が似

て居る。不思議だなと心窃かに思ふ。

赤兒はホギヤア〜と啼く。初生の孩子還つて六歳を具すや否や、急水上に毬子を打すなど、自問自答する。最う赤兒に氣を奪はれて、産婆さんが神佛ぢやないやうに思ふ。人間は勝手なものぢやと自ら驚く。

いよ〜赤兒に命名せねばならん。何と命名しやうかとは、俳句を考へるよりも六ヶ敷問題だ。赤兒は猿に似て居る。ことしは申歳である。こは尾張の國である。それでは豊太閤に私淑つて、藤吉郎と命名しやう。藤吉と云へば丁稚のやうぢやが藤吉郎と云へば口調が好うて男子らしいと、遂に藤吉郎と命名する。早や此の端午には豊太閤の大將人形が欲しいナと思ふ。我ながら親心は馬鹿なものぢやと思ひながらも馬鹿な事を考へるのがつまり人情の尊い處ぢやと理窟を付ける。自祝一句

僕の兒は太閤さんぢや猿の春

七、建仁寺の臘八

臘八とは、釋迦が雪山で紫の明星を看取し、豁然大悟徹底せられたてふ日に相當するので、三千年以降の今も尙京の五山では、十二月の一日より七日の朝まで、一山の雲納居士等は、長坐不臥、いづれも心王を把捉せんとて、ひたぶる工夫を凝す。僕も臘八の一夜、建仁寺へ行つて禪堂に坐つて見たが、彼の基督降誕の夜半にも、荒野を照す紫の星が、驢馬に乗り行く羅馬の博士達を、ベツレヘムへ導いて、馬槽の中に聖母と嬰兒に黄金没薬乳香を捧げつゝ、禮拜せしめた事を想ひ浮べて、今宵の星も亦、全亞細亞の光いや此大なる我を照す瑠璃光明であらうといと崇高な感が起つた。

菩提樹の落葉を踏んで、専門道場の門を這入つた道場では、一切學者に足袋を穿くことを許さない。況んや首卷をや、懷手をや、着倒れの京美人などなら、一遍に風邪引きさうな寒さだ。僧舎の「照顧脚下」と木札を打つた臺所より上ると、こゝには幾十足となく靴あり、下駄あり、萬縁叢中紅一點の女下駄も揃へてある。其鼻緒が董色だといよゝゝ詩的だなと思ふ。暗い本堂の廻廊を傳うて行くと、其外れの階段に「聖侍」と記した行燈が點してある。草履を穿いて登を靜かに禪堂へ行く。

禪榻は満員で、其人數雪山の羅漢よりも多いやうだ。但し女下駄の主人はこゝに入るを許されない。本堂側に女ばかりの一室がしつらへてあるので、禪堂は清淨潔白、脂粉の氣微塵もない代りに、時に祇園あたりか、窓の障子の音が、手に取るやうに聞えて來る。端坐して居ると、外は月夜影ばかりであるまい。居並ぶ雲納居士の心頭には、どんな繪が描かれて

居るであらう。又光線でも欲しいなと思つて居ると警策を捧持した影の如き僧二人が行容肅々たえず堂内を巡検して雲衲の惰眠を覺醒する。其痛棒の数が夏季は六つ、冬季は法衣の下着が厚いので、八つの拵であるさうナ。此痛棒のお鉢が僕等にも廻つて來るのではないかと思つたが居士には一向喰はさないので、やれ〜と安心した。

これが僧堂の衛生法と云ふのであらう。足が痛くなる頃合を計つて、拍子木が二つなるを合圖に、雲衲居士が一齊に禪榻より下り立つて、冷き堂内をぐるり〜と數周する。又拍子木を合圖に結伽趺座をする。これに靜中動ありと云ふ趣きがある。暫くすると、一老が右總參——と聲を懸けると、バタ〜と右側の禪榻のが出て行く。大方濟んだ時分に、又同じく一老が顔を見せて、左總參——と聲を懸けに來た。此時僕等も水涕を拭んで、一室の溜りに行くと、すぐ總參が始まつて、前側より順々

に起て行く。後の鴉が先になると云ふやうな事はない。個々の參禪が濟む毎に、廊下の突當りなる老師の室でチンと鈴が鳴る。それと相應じて、次の者が「斷再來」と記した木札の上に置いてある撞木を以て、小さい鐘を二つカンカンと叩いて、交る〜起て行くのだ。皆どんな事を言つたか、此方までは聞えない。唯一人虎の如き聲を出して、進め——と默雷老師に號令を懸けた居士の聲が、一頻り四邊に響いたばかり、頓て僕の番になつて、縁を傳うて行くと、臘梅を活けて達磨の像を掛けた室に獅子の眠れるが如き眼をして、老師が端坐して居られるので、僕も獅子見の一吼を發して見た。見性が濟んで再び禪堂に坐ると、所謂禪榻夜闌にして、鐵よりも冷かである。達磨然と赤毛布を敷いた一居士が目立つ。焼餅を二つづゝ配られる茶粥を饗應はれる。了つて元の枯木寒巖のやうな靜坐に返ると、寂寞としてたゞ水涕、咳、拂、警策を打つ響が、牙を渡るの

みて紫の明星が輝く曉天も程近く、寒氣いよ／＼骨に泌む時突如と一
 老が走り行くと叫んだ言訖らぬ中、禪榻の雲衲居士一齊に飛箭のそれ
 の如く堂外へ走り出した、僕は之を機會に、自庵へ歸つて、今度は炬燵臥
 禪と洒落ながら、臘八とはなかく、寒いものだなと思ひつゝ、いつしか
 曉夢を結んだ翌朝、默雷老師の似された偈。

臘八満願偶成

憶昔雪山成道人、彼何人矣我何人

曉天雲盡星如玉、一顆分光九十人

臘八接心が濟むと僧堂の煤掃西の岡へ大根貫ひにも行かねばなら
 ぬと雲衲の語合へるなど、何たる禪寺の俳味の饒いことぞや。

無字關頌句

臘八に獅子兒初めて一吼かな

臘八や大千世界星ばかり

臘八や星を見たのは釋迦の臍

臘八や我がものれ瓣香す

八、徳源寺の臘八

名古屋市東北の町外れ、稍市中の紅塵に遠ざかつた處に在る徳源寺
 は昔から江湖道場として、名高い臨濟宗の禪刹である。八日からは同僧
 堂の臘八接心で、數十名の雲衲は、いづれも勇猛精進、一大事の工夫を凝
 らして居るのだ。

此の道場は原の白隠禪師の法孫、峨山和尚の弟子で、隱山卓洲と並び
 稱せられた、卓洲和尚の開創だ。禪宗の系統から云ふと、却却八釜しい道
 場である。彼の蘇山和尚など云ふ歴々も、こゝで潜淵多年骨を折られた

ので實に名古屋のやうな俗地に捨て置くのは惜しい靈山である。

如何にもこゝは蓬萊靈山と呼ぶだけに、毎曉毎曉水彩畫のやうな建中寺の鬱蒼たる森からかけて、こゝの松林一帯一山門の風致を添うる。と後世の儀表たらしむべく裁ゑてある。上を今しも瞳々として東海の銀波を蹴つて出た旭の影が射す、それを打仰ぐ心地の好い事と云つたら、不斷に草や木までも青青たる佳氣を吐いて居る。

而して僧堂の富裕な事も、今日では恐らく海内第一であらう。これは名古屋に熱心なる佛教信者が多く、常に外護依養を怠らぬから、此の點に至ると、名古屋人士は實に感心である。金と共に心を忘れぬのは美所である。古來美濃尾張は禪風の盛んな土地で、名僧大徳を輩出して居るが、大いに由縁ありと思はれる。徳源はこれ井深虎溪とともに京都の五山に對峙すべき三禪窟の一目下掛錫の僧鳳凰は四十有餘名に達し

て居るさうだ。それに喝雷棒、雨日夜鉗、鎚を加へて居られるのは、碧松軒、蘆山老師、老師の眼光は、臘八になるといよ／＼炯々たるものぢや。

世の中に恐しいもの二ツあり、師家の眼玉に月末の鬼とは能く云つた歌だ。

僕も、建仁寺の默雷老師からの添書を付けられて、此の徳源僧堂へ日々通參する事になつたので、社務の多忙な裡から時々忘れられぬやうに顔を出す。劈頭に碧松軒老師から頂戴した公案は

法華經曰 深入禪定見十方佛

と云ふのだが、公案に由て骨さへ折れば、權兵衛さんでも太郎兵衛さんでも、すぐ見性成佛出来るのだ。次に貰うたのは、

何故此の手を手と云ふ乎

との一大難問題だ。さあ此の手がちや、我手何ぞ佛手に似たる、我足何ぞ

驢脚ろけつに似にたるで、我々凡俗ぼんぷくには却々容易えいゐに透破てうは出来ぬらしい。
など、道々みち専念せんねん工夫くふうを凝こらしつゝ行くと、僧堂そうだうの門前かどまへに石標いしひょうが二本
立つて居る。それに

此是選佛場 心空及第歸

と龐居士ぼんこじの偈げが彫ひ付けてある。及第だい歸きぢやない、いつも落第らくだい歸きぢやと可笑わらわくなる道場だうぢやうの玄關げんくわんには、照願しょうがん脚下きゃくとあつて、さちんと下駄げだが鴛鴦うんおうの沓くつのやうに穿はき揃そろてある。副司察ふくしさつには、元妙げんめう心寺しんじに居たと云ふ機鋒きほうのありさうな坊ぼくさんが居られる。向うの聯れんに

客來何説京城事 又費山中半日閑

と書いてあるのが嬉しい。卓洲たかす和尚わうの香積かうじき本堂ほんだうに掛かけてある禪徒ぜんとの龜き鑑かんなどを讀よんで行くと、禪堂ぜんだうの入口いりぐちに白隱はくいん禪師ぜんじの爪牙窟つゝがくと大書たいしよせられた額がくがある。爪牙窟つゝがくとは、一讀いちどくしても慄然りつぜんとする。鳩鳥うづは尾塗びぬ毒鼓どくこのやうな

文句ぶんくだ。堂内だうないには、今しも數十人の雪柄ゆきづかが榻たの上に端然たんぜんとして三昧さんまいに入いつて居る。登のぼの上うへを警策けいさくを捧持ほうぢした僧そう二人ふたりが凛々りんげしく結束けつそくして肅々しゆしゆと歩あつて移うつつゝ、監視かんしして居る。大きな咳せき拂はらひ一つする者ものもない。堂内だうないから見渡みわたすと、早はやや初霞しよかの棚たな曳ひく森越しんこしに、建中寺けんぢゆうじの臺たいが見みえる。忽たちまちチーンと鈴かねが鳴なる。雲柄うんづかは總立そうだちになつて榻たを下くだりる。堂内だうないをぐるりゝと走はせ廻まわる。襪子わくぢを着きけず、皆赤跣あかぢのまゝであるのだ。記者きしよもしばらく其の走り行はりの御仲間ごぢゆうぢ入りをする。最もう出社しゅつしやの時間じかんが迫おそらぬかゝと氣きになつて、屢々しばしば懷中時計わいぢゆうぢけいを出だして見る。其の忙いそしないこと、恰まさで瀛車えいしやに乗のつて坐ま禪ぜんをして居るやうなものだ。

午前九時に喚鐘くわんしやうの出る筈はずだったが、今日は午後二時にならねば喚鐘くわんしやうが出ないとの事ことで、僕ぼくだけは一寸密參みつさんを濟すまして歸宅きたくしやうと、副司察ふくしさつの火鉢ひばちの前に坐まつてゐると、スゝと障子しやうぢを開あけて一人の大姉だいしがお辭儀じぎ

する副司寮の坊さんに、今日から此のお方が見えませよろしうと云ふ。見ると束髪に結うたうら若い婦人で、これは愛知育兒院の保母長、一生未婚で通さうと云ふ變り者ぢやと坊さんが説明して呉られる。市中には犬や猫や人間が雜然として居る、已に正午前だ。

九、俳句説法

△近來中央の俳壇では、通俗なものを美化さすてふことが、一の趨勢となつて居るさうだが、通俗なものを美化さすと云ふことは、餘程手腕を要する仕事で、面白い新研究の方面である。

あこし繪や親の大工の子煩惱
 荷車の片輪はづすや蚊喰鳥
 句 虚子
 佛

などは即ち通俗なものを美化さした作例である。

△大體俳句其物が通俗なものであるから、俳人はあらゆる社會の萬象を句にするてふ覺悟を要す。此點に於て、僕は人事に重きを置く、成るべく此方面の句を作つて見たいと思ふ。

△會て花の本芹舎などが矢立と云ふ題で句作をしたのを、或近眼者流などは、之を俗極る題として排斥して居れど、旨味く美化し得さへすれば、矢立でも算盤でも我家の俳諧である、いくら俳句でも、社會に縁遠くなる、其本領の幾分を失ふことゝなるのだ。僕は常に思つて居る。新聞紙の三面種は、人事俳句の好材料であると、掏摸でも賭博でも萬引でも、乃至小判發掘事件でも、木屋町の高等賣笑でも、凡て句種である。

△元祿時代の女流俳家は、衣裳の模様を始め、其風俗の細かい所までを詠んで居る、これは女流の常として、何より先づ身の廻りに氣の付いた故と思はれる。いや時代の好尚が、濶達奢侈であつたからであらう。又江

戸座の句を讀むと、花廊其他の風俗が、色彩までありくと眼に映つる。普通の風俗史では、氣の付いて居ない細微な所までが解るやうに思ふ。それで明治の今日では、是非社會人事の寫生句は勿論、其底髪や、角帽や、燕尾服や、電車や、あらゆる風俗を美化さして、明治俳句史上に残して置きたい。

△明治廿七八年の新派勃興時代には、随分歴史を詠んだ句も見えたが、近來は一向歴史的の句を見當らぬ。名所を詠んだ句さへ稀れくとなつた。名所と有職故實の句をよくするのは、關西では四明翁ばかりであらう。

△京と奈良の名所を知らねば、古句の半を解することが出来ぬと、故子規翁も申し置かれたやうだ。昔の名所、今の名所、これは造化翁が我々に遺せる國寶だから、我々俳人たる者は、せめて一句位は、名句を吐いて置

かぬと、子孫に申譯がない。

△歴史や地理の句は日本ばかりに限らぬ。廣く世界の歴史と地理を句材にすれば、明治時代の産物として、なか／＼面白い句が出来るに違ひない。現に碧梧桐子が全國行脚に依つて、どれだけ明治俳句史の光彩になるか、知れぬ如く、是非世界行脚の俳人も遠からず現はれて貰ひたいものである。而して其紀行を天下に公表すれば、讀者社會の之を歓迎すること、は決してマルコポーロの紀行の比ではあるまい。

△我が日本の歴史にしても、未だ／＼十分句材を取る餘地があらうかと信ぜられる。此程栖鳳畫伯が、神代史を畫に見たいと話されたが、俳人も亦神代史を研究すると共に、其雄大なる空想美を把握して置く必要がある。

△僕は世の俳人が、それ／＼の特長を自覺して、それを十分に發揮せん

ことを勸告したのである。猿の人真似は、不見識も亦甚しいから、董は董牡丹は牡丹と各一家の特色を助長して貰ひたいので、彼の無暗に流行にかぶれて、其特長までを没却するのは、却て俳壇の爲に弔すべき現象である。流行を逐ふも可なり、されど各自不易の名句も残して欲しい。△主觀的の句は稍もすると禪の公案的に、解つて解らぬやうになる。解つて解らぬやうな句に却つて何とも云へぬ興味を感じる事もある。

雷に噉付く虎や秋の風

默雷

十、俳 偈

○夏中偶吟

短夜の枕頭へ召す料紙かな
座蒲團を敷くや小僧も木魚も

開き初むぼらたんに飲む新茶哉
榻に吹く晝松風や捨團扇
人の飲む新酒に咽喉を鳴すかな
前垂の鱗の粉を拂ひけり
じやあくくと立小便や夏の川
初袷羽織の紐を結びけり
夫婦して押へたり馬ほどの蚤
けふ頭痛けふ腹痛や五月雨
こそぐられても寝入花時鳥
花見喧嘩瓢を頭となぐりけり
この春に我子死なしぬ涅槃像
此風景鶏鳴狗吠明易さ

○制問拈得

出代や故郷の人と立話
紙で捲く紅さし指や煤拂
づぶ濡れて裸となるや水掛合
千尺の松の大樹や筆
秃筆を焼捨にけり水仙花
犬の足踏めば嚙付く五月闇
御馳走の酢揉匂ふや夏座敷
寒彈す憎い繼子と呵りけり
大川を渡れば颯と青嵐
炭といへば炭團を持って來りけり
長官を突倒すそれも年忘

煤拂や賣扇庵の古扇
初雪や赤跣で歩く乞食あり
珠數も入れ栗も入れたる袋かな
色好む下男なぐるや胼の手で
雪黒しと見れば鴉の飛にけり
初午や寝牛天神角力取
名月にちらりと動く兎かな
柿二つ澁い一つを踏み潰す

○臘 八

臘八の異様に鳴る陀羅尼かな
臘八や一念不起の白蓮華
臘八に月夜鴉の聲奇なり

臘八や床に牡丹花睡猫圖
 臘八や九重錦と五逆雷
 熱いく臘八粥を啜りけり
 臘八は寒し塗毒鼓焼鳥尾
 臘八や爛々として燦迦羅眼

大正四年十二月十一日印刷
 大正四年十二月十五日發行

禪門叢書第三編
 定價金壹圓



編輯者兼
 行輯者

高 島 大 圓
 東京市小石川區原町六番地

印刷者

佐 久 間 衡 治
 東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所

株式會社 英 舍
 東京市京橋區西紺屋町廿七番地

發行所

東京市小石川區原町六番地
 振替口座東京一五六八六
 電話番町二六〇八

丙午出版社

大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正昭世の文教に貢献せむがために現代第一流の宗教家學者文藝家を煩はして『大正文庫』を發行し今や全部十二冊に完成す外形は電車汽車中の繙讀に便に内容は處世修養の伴侶に好し——(全部完成)

- 第一編 明治思想小史 文學博士三宅雪嶺先生著(定價五十錢郵稅八錢)
- 第二編 此 一 筋 文學士沼波瑠音先生著(定價七十錢郵稅八錢)
- 第三編 來世の有無 新佛教徒同志會編(定價七十錢郵稅八錢)
- 第四編 禪の極致 大内青嶽先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第五編 予が婦人觀 黑岩周六先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第六編 狐禪狸詩 釋清潭先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第七編 噴 火 口 高島米峰先生著(定價八十錢郵稅八錢)
- 第八編 ひとみの旅 杉村楚人冠先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第九編 書窓 車窓 加藤咄堂先生著(定價六十錢郵稅八錢)
- 第十編 人と超人 ショウ原著堺利彦先生譯(定價五十錢郵稅八錢)
- 第十一編 六十年 文學博士村上專精先生著(定價五十錢郵稅八錢)
- 第十二編 沈黙の饒舌 内田魯庵先生著(定價八十錢郵稅八錢)

佛教講義錄

僅に一ケ年で佛教の大系が學び得られる 學界空前の佛教講義錄出

佛教がわからなくては日本の歴史の解釋が出来ない日本の文學も味ふことが出来ない日本文化の由來するところも知ることが出来ない従つて佛教を知りたいといふ人は多しが唯三四年合八年では手もつけれないそこで誰にでも手つ取り易く佛教の大系が飲み込めるやうにといふので現代有数の學者に請ふてその専門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して社撰な代作講義を掲載するが如きものと同一視するなから

- 佛教研究法 東洋大學教授 島地大等
- 佛教概論 加藤咄堂
- 印度の佛教 帝國大學教授 萩原雲來
- 支那の佛教 東洋大學教授 境野黃洋
- 日本の佛教 豊山大學教授 境野黃洋
- 佛典の解説 帝國大學講師 常盤大定
- 法華經義釋 天台大學教授 島地大等
- 禪學要義 加藤咄堂
- 歐米の佛教 宗教大學教授 渡邊海旭
- 佛教美術 帝國大學講師 中川忠順
- 宗教學要義 眞言大學教授 融道玄
- 基督教綱要 慶應大學教授 廣井辰太郎
- 神道綱要 東洋大學教授 足立栗園
- 其他臨時講義を増加すべし

毎月一回十五日發行	一冊	二冊	三冊	四冊	五冊	六冊	七冊	八冊	九冊	十冊	十一冊	十二冊
一ヶ月分	三ヶ月分	半年分	一年分	一年分	一年分	一年分	一年分	一年分	一年分	一年分	一年分	一年分
六十錢	一圓五十錢	三圓	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢
六十錢	一圓五十錢	三圓	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢
六十錢	一圓五十錢	三圓	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢
六十錢	一圓五十錢	三圓	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢	五圓五十錢

發行所 東京 小石川 區 原町六丁目 電話 六八〇番 丙午出版 社

「萬朝報」記者 大住晴風先生著
現代思想講話

定價金 一圓廿錢
郵税金 八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳説を究め進んでゼームス、オイケン、ベルグソン等の如き現代思想を代表する大思想家の説くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遠なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

暮村隱士 久津見藤村先生著
現代八面鋒

定價金 八拾錢
郵税金 八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

暮村隱士 久津見藤村先生著
眞人偽人

定價金 壹圓
郵税金 八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か瘡癢を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ偽人はこゝにその面皮を剥かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの概あり

堺 利彦先生著
樂天囚人

定價金 六拾錢
郵税金 六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將たハ蘇ル一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文社社長 堺 利彦先生著
賣文集

定價金 壹圓
郵税金 八錢

卷頭之飾 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇拔痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 木下尚江君を評す 第二編 子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、墓見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 喜劇「谷川の水」(パロディ) 第四編 逆徒の死生觀 六、死の趣味 第三編 如寒村 二、クレンクビニ、大杉榮 三、無謀人 耶蘇 高島素之

堺 利彦先生著
自傳赤裸の人

定價金 九拾錢
郵税金 八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらるる波瀾重疊神出鬼没の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彦先生なり一讀してルソー前に立てるの感起さしむ

カウツキー先生原著
堺 利彦先生譯
社會主義倫理學

定價金 壹圓
郵税金 八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道徳が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の味を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸徳秋水が最後の文章
基督抹殺論

定價金 七十錢
郵税金 八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も讀つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に呻せるの間特に此一巻を著す所論痛絶快絶行文悲絶憤絶嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を扶殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憎讀を費ふ

最新論理學

文學士 渡邊又次郎先生著
定價金一圓廿錢
郵稅拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ巻末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

筆と舌

加藤唯堂先生著
定價金七十錢
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演説と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

亂れ雲

村上博士序
藤井瑞枝女士著
定價金八十錢
郵稅金八錢

女史は跡見花隠先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宣正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁風刺教訓皮肉或は鋭き觀察或は隠れたる温情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

新氣運

「無我愛」首唱者
伊藤隆信先生著
定價金八十錢
郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の罵詈喧嘩輕侮憎惡の中に立ち應面なく昂然と無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの!

廣長舌

三宅雪嶺先生序
高島米峯先生著
定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤唯堂先生曰はく「米峯今胸中鬱勃の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々警世の大文字」と

惡戰

加藤弘之先生序
高島米峯先生著
定價金八十錢
郵稅金八錢

著者曰はく「これ機が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく職なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

理想的商業

島田三郎先生序
高島米峯先生著
定價金二十五錢
郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人尻こ垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を説きこの道を教へてお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ちこの書なり

修養史譚

前外務大臣 伯爵 林董閣下序
東北大學 總長 澤柳政太郎先生序
櫻井 千河岸 實一先生著
定價金壹圓
郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を續くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

前外務大臣 伯爵
林 董閣下纂譯
修養の模範
定價金七拾錢
郵税金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する英譯の乏しいのに窮り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を読み毎に精神修養の模範とするに足るやうな英談逸話を翻譯摘録して遂にこの書を作成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

文學博士 村上專精先生著
俗修養論
定價金壹圓
郵税金八錢

古聖實踐の芳蹟を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を説明し苟も模範とするに足るべき善行美談は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり

文學博士 村上專精先生著
改訂自修信錄
定價金六拾錢
郵税金八錢

これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり言々已の實踐を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著
誠のしるべ
定價金四拾錢
郵税金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著
女性訓
定價金四十錢
郵税金六錢

本書の内容は天職中庸實業謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を摸み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

スタンフォード大學總長
マシヨルダン博士原著
中村 平先生譯
人物の修養
定價金五十錢
郵税金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「マシヨルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらる紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ること依て利すること尠からざるは言を待たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

ウキリヤム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補
處世
自己測量
定價金五十錢
郵税金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我が邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡徳邪僻の穢村人格完成の障礙立身處生の嚮導社會道徳の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年紳等がこの生活難の世に處して新しき運命の祿庫を開くべき鍵はこゝにあり

黒岩周六先生講演
人生問題
定價金七拾錢
郵税金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に達着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て茲に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の闇ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは「釋と満足と活力とを得て温く且つ光ある人生に經營することを得ん

退耕錄
東北大學總長 澤柳政太郎先生著
正税金 壹圓
郵税金 八錢

死後の生活
フエヒネル先生原著
文學士 平西元吉先生譯
定價金 五拾錢
郵税金 八錢

強肺病全快術と肺病全快談
杉村巖橋先生譯編
定價金 九十錢
郵税金 八錢

南半球五萬哩
文學博士 井上圓了先生著
定價金 九十錢
郵税金 八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はずし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百餘の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焔あり理窟あり辯技にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんと欲する所は言ひ盡くし現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる時と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豊富なる暗示刺激を興ふるや疑ふ可からず

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を収めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を讀んで天來の福音に接せよ

南半球を一周し赤道を四週し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十餘上更に花を添ふ

活佛教
文學博士 井上圓了先生著
定價金 壹圓拾錢
郵税金 八錢

國民と宗教
帝國大學教授 高橋順次郎先生著
文學博士 羽溪了諦先生著
定價金 七十錢
郵税金 八錢

釋尊の研究
文學博士 松本文三郎先生著
定價金 壹圓
郵税金 八錢

彌勒淨土論
京都帝國大學文學部大學長 文學博士 松本文三郎先生著
定價金 壹圓
郵税金 八錢

明治の宗教界思想界を震盪せしめたりし「佛敎活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛敎をして活佛敎たらしむるの福音

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳説せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話なれば又以て演説講話の好模範たるべし◎附録として研究上修養上極めて重要な論文數種を收む悉く學界の珍

本書筆を釋尊以前の婆羅門敎の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の議論を破る誠識に敎界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

宗敎學上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要なる地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋没によりて全然暗黒に歸すこれ佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大恨事ならざらば松本博士多年の遺著を傾けその專攻する學科の立脚地より彌勒淨土の由來淵源を詳説し博士の遺著「極樂淨土論」と相持つて茲に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛敎の淨土思想を談せんとするものぞ

ポール、ケールス先生著
 學習院教授鈴木大拙先生譯
阿彌陀佛
 定價金三十五錢
 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケールス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たることや弊社に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の盲無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
 文學士 常盤大定先生著
釋迦牟尼傳
 定價金七十錢
 郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生著
孔子傳
 定價金壹圓四十錢
 郵税金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
 互理章三郎先生著
王陽明
 定價金一圓五十錢
 郵税金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈傳ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師
 境野黃洋先生著
補聖德太子傳
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

大内青嶺先生序
 高島米峰先生著
一休和尚傳
 定價金九十錢
 郵税金八錢

元日に觸懐を振廻はして人の皮臍を抜き末期に養を略つて梵天に捧けた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一笠一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かかはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授
 忽滑谷快天先生著
達磨と陽明
 定價金壹圓拾錢
 郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神練磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道徳の指導者たり

明楊起元評註
 加藤咄堂先生和譯
和譯維摩經評註
 定價金七十錢
 郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達な文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤响堂先生著
原人論講話
 定價金六十錢
 郵税金八錢

佛敎典籍多しと雖も之れを儒道二敎の敎義と比較して佛の嶄然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ驚頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛敎の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤响堂先生著
通俗講話の理方法
 定價金九十錢
 郵税金八錢

通俗敎育の必要日に通りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豊富なる経験とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聴者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解説し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば敎化の秘訣維新の奥義講話の資料收めて一卷の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繕かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
 清澤先生著
寒山詩新釋
 定價金五十錢
 郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ韻語か是れ時語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
 清澤先生著
詩新釋
 定價金五十錢
 郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉り和は虎關以後絶海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と韻法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此くの如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
 忽清谷快天先生評釋
和名士參禪集
 定價金壹圓
 郵税金六錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の遷帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黄山谷蘇東坡白樂天張無盡晁休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大徳の錯綜に接するを得しむ

マクス、ミユラー博士原著
 文學士 清水友次郎先生譯
宗敎學綱要
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

清水學士佛敎大學に敎授として宗敎學を講ずるや近代稀有的の宗敎學者マックス、ミユラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて敎ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗敎學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校敎授
 文學士 野々村直太郎先生著
宗敎と倫理
 定價金五十錢
 郵税金八錢

正にこれ新宗敎論なり新道徳論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饒渴に悩める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗敎と舊道徳とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗敎論を評す

眞宗補敎 北條蓮華先生著
眞宗の敎義
 定價金二圓
 郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛敎の精華にして又實に日本佛敎の最大勢力なり本書は佛敎爲學を以て開えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資叢如上人との敎義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力敎の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を冀ふ

アー、エフ、ステンツラー先生原著
 エル、ピツシエル先生増訂
 フクトル、フイロツフイエー
梵語入門
 萩原雲来先生譯補
 定價金壹圓
 郵税金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は成な歐語の梵文典を使用すされど
 歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學ばざる可からざる不便あり第二價格
 低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむ
 がために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は
 僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

文學博士 高楠順次郎先生閱
 曹洞宗大學教授
 立花俊道先生著
巴利語文典
 定價金一圓
 郵税金八錢

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下において巴利語を修むること
 と多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる
 巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には
 多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に従ひたれば
 初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべ
 し

慈雲尊者眞筆
 高楠順次郎先生序
 阿滿得壽先生著
悉曇阿彌陀經
 定價金壹圓
 郵税金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘
 經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡ばんが爲なり梵文に加ふるに
 漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂
 正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺
 ふに易からん

平子鐸嶺先生遺著
補校法上宮聖德證註
 定價金一圓
 郵税金八錢

『上宮聖德法王帝說』はその記事切實その文詞醇古多く寧樂已往の記録を
 取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須
 す而して狩谷掖齋先生の『證註』に至つては群說を折衷し正誤を辨別して
 先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多
 少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽強記にして史
 眼犀利掖齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足ら
 ざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士村上專精先生編
科註原人論
 定價金十二錢 郵税金二錢
科註大乘起信論
 定價金十六錢 郵税金二錢

この二書は共に筆記書入れ等に使せんがため本文の上下に空白を存し置
 きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

高島米峰先生著
 學生參考
洋史
 定價金十三錢
 郵税金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべか
 らむも學生を養くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑
 はざるなり」と

文學博士 三宅雪嶺先生著
增偉人の跡
 定價金壹圓
 郵税金八錢

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を
 明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面
 目は躍如として茲に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にし
 て修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せし
 か社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば覆くは此の偉人の偉
 著に問へ

文學博士 三宅雪嶺先生著
小泡十種
 定價金四十五錢
 郵税金八錢

博士の學殖富贖に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あ
 り今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を
 語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては清澗盡きざる大河となり數
 じては續紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著
明治思想小史
 定價金五十錢
 郵税金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高壇に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前に思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして對切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の産物なりしかを知らずして依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

文學士 沼波瑛音先生著
此筋
 定價金七十錢
 郵税金八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそらな方にのみ、これを借む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

新佛教徒同志會編
來世之有無
 定價金七十錢
 郵税金八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するの滅しないのか元來吾等に靈魂などいふものがあるのか無いのか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著
現代青年論
 定價金十五錢
 郵税金二錢

本書は著者が某會社の青年に向つて講演せるもの、筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し
 一、青年の力—二、今の青年は依頼心が強い—三、今の青年には氣概がない—四、今の青年は成功を急ぐ—五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する—六、今の青年は思想が羸弱である—七、今の青年は信仰が乏しい—八、今の青年は同情が乏しい

大内青樹先生著
 結城素明齋伯齋
禪の極致
 定價金六十錢
 郵税金八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ。古來禪を説くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々出で、愈々迷はしむることを。大内先生學深く徳高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗語を以て、幽玄の理を説き、深遠の法を語ることに、殆ど天下獨歩にして本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附録「五位頌講話」また先生獨創の見識を以て、縱横に講解す、蓋近來の大文字なり

黒岩周六先生著
予が婦人觀
 定價金六十錢
 郵税金八錢

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黒岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々様々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ、遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

釋 清潭先生著
狐禪狸詩
 定價金六十錢
 郵税金八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠窟詩の窟一蹶して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

中原鄧州老師著
 大石正巳居士序 飯田權隱居士跋
南天棒禪話
 定價金一圓廿錢
 郵税金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈教懇到兒女童孩も亦度せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縱横に説き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり人若し南天の痛棒亂下し來るの間に立ちて平然としてこれを喫了し得ば則ち人間の大事こゝに成るべし莫くばまづ聊かこれを試みよ

釋清潭先生主筆
月刊 漢詩
一年分五十錢

釋清潭先生を中心とする漢詩開演社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す
別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著
晚晴樓文鈔
定價金八十五錢
郵税金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり説あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし荷も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須むざるなり殊に明治時代の漢學文藝辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然巻を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す餘陰深處にこれを繕かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序
高島米峯先生著
噴火口
定價金八十錢
郵税金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や豁然として爆發しこゝに碑となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその著者「廣長舌」「惡戰」等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士 村上專精先生主筆
月刊 人道講話
一冊 七錢五厘
一年分八十二錢

「人道講話」は村上先生の人道講話を連載する者
「人道講話」は教育と宗教と道徳との三面を有す
「人道講話」は精神の涵養を以て教育の本領とす
「人道講話」は人道の實踐を以て宗教の要務とす
「人道講話」は父母の孝養を以て道徳の大本とす

記者 松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊 藝文
一冊 廿二錢
半年分 一圓廿錢
一年分 二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
「藝文」は東西兩洋の學術文藝に對し最謹嚴深究の批判を下さむとする者也
「藝文」は關西思想界の中心として兼て關東の思想界を風靡せむとする者也

「東京朝日」記者
杉村楚人冠先生著
ひとみの旅
定價金六十錢
郵税金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、専ら現代を寫し、人間を論ず。會て、洛陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又會て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

加藤咄堂先生著
書窓車窓
定價金六十錢
郵税金八錢

天地の秘奥を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地籟あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の德澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出でては車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

學習院教授 鈴木大拙先生著
帝國大學講師
スエデンボルグ
定價金五十錢
郵税金八錢

神學界の革命家、天界地獄の通譯者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身を集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此著成る所以。

文學博士村上專精先生著
六十年
 定價金九十錢
 郵税金八錢

これ村上博士が過去六十年間、惡戰苦闘の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして、現代青年が以て龜鑑とすべき絶好の立志傳たり。殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は、明治佛教の側面史として、教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして、眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり。

文學博士松本文三郎先生著
佛典の研究
 定價金九十錢
 郵税金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て、實に日本學界のオーソリティー也。多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに、輒近鑽燻その他に於て發掘せられたる佛典の研究は、正に先哲未到の新説なりとす。佛典の眞偽を如何に辨別し、經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず。

久津見藤村先生著
ニイチエ
 定價金九十錢
 郵税金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所、今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ。本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を説きしか」に起し、「宗教と道德」「研究と信仰」等次第を返うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを説明し、延いて老莊程子の支那哲學に論及す。惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎。

文學博士松本文三郎先生著
補宗敎と哲學
 定價金七十錢
 郵税金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣。惜しいかな、巻帙浩翰初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず。今我が土屋先生これを遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて、以て文章の結構作法を知らしめ、これに詳解を施して、以て故事熟語の意義を明にす。學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず、地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり。

東洋大學教授土屋鳳洲先生編
評解唐宋八家文鈔
 定價金四十五錢
 郵税金八錢

譯は東洋に於ける精神界の特産なりしかも、從來誤つて山林の徒のみによりて拮弄せられ、活きたる人生と殆ど没交渉なるかの觀ありしは、蓋し未だその第一義を闡明し、その著者の處を説述することの徹底せざりしに基き、その所得の公案を解説し、一は以て初學者の指針となし、一は以て人生の苦悶を除くせむとす。不立文字、教外別傳の禪も、本書出でて、その近代色彩の頗る鮮なるものあるを看取し得む。

帝國大學講師鈴木大拙先生著
禪の第一義
 定價金一圓
 郵税金八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふや、日本文壇の老維摩、内田魯庵先生が沈黙の懷中に一大獅子吼を試み、婦人を濟ひ、文士を度し、靈肉の調和を説き、生活の難易を教ふ、その言の懇切なるその論を穩健なる誠に人間處世の好南針たり。これを目して饒舌となし、これを評し、咄哉と言はむは、蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの。

内田魯庵先生著
沈黙の饒舌
 定價金八十錢
 郵税金八錢

此書は思想界の奇傑、スエデンボルグの新基督教説にして、救済には信と行とを要すること、愛即ち意志は人格の基礎なること、自由あるが故に善惡あること、善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著。

スエデンボルグ著
 鈴木大拙先生譯
新エルサレム
 定價金六十錢
 郵税金八錢

此書は思想界の奇傑、スエデンボルグの新基督教説にして、救済には信と行とを要すること、愛即ち意志は人格の基礎なること、自由あるが故に善惡あること、善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著。

人と超人

定價金九十錢
郵税金八錢

ベアトリック作 辨利彦先生譯
ショウ熱全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼の生命哲學彼の剛性親彼の皮肉彼の風刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り
譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、ショウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敦で見た人と超人(松居松葉)等あり

おぼけの正體

定價金五十錢
郵税金八錢

文學博士 井上圓了先生著
本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者懐い者悲しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の真相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聴きたがる小供のためにも一箇靈の正體見たり枯尾花など、悟つたつもりの大人のためにも趣味と賞益とを興へること多大である

青巒禪話

定價金壹圓廿錢
郵税金八錢

東洋大學長 大内青巒先生著
この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう深山なりそれ以上廣告文でコケを感す必要いづこにかあるしかも試みに一二言を加ふれば平談以て微妙の法門を説破し俗話以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の秘奥を探り人心の機微に觸る迷悟凡靈の如きたゞ讀者の辨ぶところに委するのみ

印度哲學宗教史

定價金八錢

文學博士 高橋順次郎先生共著
文學士 木村泰賢先生共著
本書は著者が印度の哲學宗教の大成は日本學界の本務なりといふ確信の上に立ちて久しく東京帝國大學に於て講述せる稿本を增補整理したるものにして斯界唯一最高の權威なり收むるところ吠陀、梵書、奧義書、經書及び諸學派の開展に涉り洵にこれ印度の根本思想を説述して盡さざるなきもの有り世界無比の寶庫と稱せらるゝ印度古代の文明について闡明するところあらむと欲するものは須くまづこの秘蔵を讀らざるべからざる也

新井石禪老師著 修道禪話

定價金一圓
郵税金八錢

新井石禪老師は學に於て徳に於て舌に於て筆に於て現代禪門第一流の人なり今や世俗の往往にして野狐禪に満足し邪禪に墮在するもの多からざるを見て慈心到底截止するに堪へず故に活禪談を試みて修道處世の南針を指示す釋尊一字不説の妙諦達磨西來の眞意こゝに於てか始めて了了明

神智と神愛

定價金一圓半錢
郵税金十二錢

學習院教授 鈴木大拙先生譯
帝國大學講師 鈴木大拙先生譯
本書は天界地獄の通歴者として學者宗教家を驚倒せしめたる思想界の奇傑スエデンボルグ氏の人生觀を率直に披瀝したる者也愛は宇宙の本源にして智は愛より生ずる所以より説き起し造化の大功人生の目的を闡明す所論警拔斷案透徹譯筆明快

高島米峯先生著 店頭禪

定價金八十錢
郵税金八錢

禪坊主の禪にもあらず野狐禪の禪にもあらず語默動靜皆是禪の禪也
學林の禪にもあらず僧堂の禪にもあらず鷄聲堂の帳場格子裡に獨り自ら實參實究したるところの禪也
傳統の禪にあらずして店頭の禪也空想の禪にあらずして創造の禪也即是れ生活の實験也信仰の告白也

建仁寺派管長 竹田默僧老師著 禪の面目

定價金一圓
郵税金八錢

語も亦雷の如く默も亦雷の如し本來の面目眞に此の如きのみ今絶版せる『默僧禪話』二卷數百則中より奇峭の論と懇到の説とを選びて百五十則を獲たりこれを世に行ふ所以のもの主とし生死街頭に迷惑するものをして自性徹見の境地に到達せしめむと欲してなり

『修養世界』主筆 菅原洞禪師著
禪林奇行
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

和漢古今の居士禪僧が奇行佳話を蒐むるもの實に百數十項一として古聖證悟の過程前賢參究の所得たらざるなし綿密なる佛祖の行履澆刺たる禪林の消息正にこゝに盡きたりと稱すべき也

釋宗演老師著
拈華微笑
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

釋宗拈華し迦葉微笑す個中の消息何人か會し又何人か會せざる會する者を聖と稱へむも當らず會せざる者を凡と呼びむも亦當らず凡聖一如の境地は畢竟此書を心讀し體讀したる者にして始めて到達し得べしとなす耳

京都市平安中學講師 トーマス、カービー先生著
英文佛教讀本
 定價金 五十錢
 郵税金 六錢

著者は敬虔なる佛教信者として熱心なる佛教研究者として夙に世に推重せらるゝ英人にして本書收むる所釋尊の傳記印度諸王族の佛教傳播に盡し、狀況及歐米に於ける佛教學者の筆に成れる論文英語に翻譯せられたる佛典の拔萃並に將來佛教の歐米に傳播すべき趨勢に關する著者の豫見等凡そ二十餘章蓋し佛教學校の英語教科書として唯一無二の良書たり

帝國大學講師 フクトル 萩原雲來先生著
梵漢佛教辭典
 定價金 五十圓
 郵税金 十二錢

本書收むる所顯密二教の法數名目を始め經律論三藏中の學語は勿論佛菩薩天龍八部天象地獄山川草木飲食器皿數方時より動詞副詞に至るまで語數甚だ豊富にして單に佛教辭典としてのみならず又梵漢辭典として未嘗有の寶藏なりこれを以て佛教を知らむと欲するもの梵語を學ばむと欲するものは言ふまでもなく一般語學者印度文藝の研究者に取りても亦唯一無二の寶典たり

曹洞大學長 秋野孝道老師著
禪の骨髓
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

以心傳心の禪直指人心の禪そこ何の膚肉ぞ何の骨髓ぞ今吾が秋野老師特に「禪の骨髓」と題して一卷を成す或は言はむ是れ好肉上の胡と易ぞ知らむ是れ指月の指なることを世の指に就着するものは則ち去れ迷雲一たび拂へば眞如の明月歌々として天地こゝに朗然これ此書を學人に薦むる所以

原僧運老師著
禪の捷徑
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

教外別傳と説き不立文字と説き而して實參實究を強ふ禪も亦難いかな易ぞ知らむ語默動靜皆是禪喫茶喫飯も亦即ち是れ禪ならざることなきを果して然らば人誰れか禪に眠り禪に覺め禪に生き禪に死せざるものぞ僧運老師八十年の禪生涯その行業直ちにこれ禪の眞諦今婆心臥止し難くて敢てこの捷徑を示す寧ろ却て大道坦々として長安に通ずるものあらむ

荒井浪光先生著
道元禪師
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

曹洞宗の開祖道元禪師遠く宋土に渡りて慕道尋師し深く佛陀所説の核心を探り詳に祖師而授の單的を領す而して歸來唱破すらく「空手還箱」と空手還箱の那一曲知らず何等の妙調ぞ佛法の要旨茲に存し禪の眞髓を盡く著者今禪師が一代の行狀事蹟を撰寫するに流麗にして巧妙なる文辭を以てし禪師の風采面目を以てして嚆矢とせむ讀者これに依つて文學的なる禪師傳は蓋し此書を以て嚆矢とせむ讀者これに依つて曹洞禪風の淵源を究むべく又これに依つて悟徹の洪範を得べし

原田祖岳先生著
參禪の階梯
 定價金 壹圓
 郵税金 八錢

原田老師洞濟二家の宗風を把持し銀山鐵壁容易に攀つべからざる底の禪に姑く階梯を設けて學人のために參禪の一路を示す夫の胡亂に大悟を語りて鬼窟裡の活計を作すが如き野狐精者流は乃ち問はず苟も荆棘林を透過して清風明月の趣を會得せむと欲する者は須らく秩序整然たる階梯を辿れ

大石正巳君序 飯田橋隠君跋
南天棒 中原鄧州老師著

南天棒禪話

定價金一圓廿錢
郵税金八錢

東洋大學教授 境野黃洋先生著

活ける宗教

定價金一圓
郵税金八錢

醫學博士 岡島狂花先生新著

現代の西洋繪畫

定價金一圓六十錢
郵税金十二錢

加藤咄堂先生推讃 箇岡清泉先生著
高島米峯先生

美人禪

定價金一圓
郵税金八錢

機鋒辛辣得て近づくべからざるが如くにしてしかも慈教懇到兒女童孩も亦庭せずむば止まざるもの實に是れ吾が南天棒鄧州老師の面目なり今著はすところの禪話一卷巻中の所談悉くこれ釋尊拈華し迦葉微笑する底のもの縦横に説き無礙に辯じて眞に四方八面來旋風打の概あり

著者が限りなき渴仰と重なりなき崇敬とを拂つて居る日本佛教の代表的偉人中特に親鸞上人蓮如上人白隱禪師の人格と教義と信仰とを精道元禪師の正にこれ一部の「列傳日本佛教史」であるとし世間叙したるもの冷かな抽象的な人間の血の通つて居ない學究的なものにはなくて此等の偉人が親しく體驗したる内の生活の上に活躍して居る眞の佛教の信仰も理會せられる

岡島博士多年研鑽の所得を組織して茲に此の書を成すその内容の概略を摘記せむか。一、代表的名畫三十二葉を挿入したる事二、從來ありふれたる氣分の斷片的な文藝採取にあらざりて科學的の著作なる事三、現代西洋十六ヶ國の繪畫を採取ひたる事四、筆を太古の繪畫史に起し、現代傾向よりの推移期に入り進みて新しき傾向即ち印象派、新印象派、後期印象派、未來派、色彩派、立體派、立體派より昨年分れたるオルフィスムに至るまで悉く精叙して盡さるる事五、一千餘語の原語索引を附したる事六、現代の版畫を七箇に分ち廣告畫にまで論及したる事

加藤咄堂先生曰はく「戀に泣く美人が嬌態を寫して佛々祖々の玄機を語る文に艶冶の趣ありて想に超脫の旨を存す孰れか禪孰れか戀「美人禪」の書讀み了りて轉々恍惚たり」と

高島米峯先生曰はく「達磨傾城之圖に參透するの具眼を以てせば始めてこの書一巻別傳の妙教理不立の好文文字たることを看取し色即空なる」と

し」と

文學高楠順次郎先生閣

帝國大學講師 文學士

木村泰賢先生著

印度六派哲學

菊判六百五十頁
定價二圓三十錢
郵税十二錢

六派哲學（數論、瑜伽論、勝論、正理論、ミーマンサー、ゴータンタ）は印度哲學の代表的思潮にして一元論二元論多元論の争汎神論有神論無神論の別機械論目的論虛無論の主張等としてこの中に含まれざるはなく又これを學科の性質より見れば物理學論理學純正哲學宗教哲學實際哲學等悉くこれを網羅せざると言ふとなし宜哉歐米の學界單に印度哲學と一言へば直に以て六派哲學を意味するが如き狀あることや然るに我國未だ嘗てこれに關して權威ある著述の發表せられたるを聞かず眞に學界の一大耻辱なりとす木村先生夙にこれを慨し研究多年漸くその完成を告ぐるや更に東京帝國大學に於てこれを講ずること一學年その間又多少の補訂を加へて遂に汎くこれを世に汎くこれを推挙する者多き貧弱なる我國の思想界に向ひ本書の如き先人未だの研究にして斯學最高の權威たるべき名著を推薦するを得たるは音に弊社の誇たるのみならずざる也

スエデンボルグ著

帝國大學講師 學習院教授

鈴木大拙先生譯

神慮論

菊判六百五十頁
定價二圓卅錢
郵税十二錢

「神慮論」はスエデンボルグが支奧神祕なる宗教を知るべき一大著述なり「天界と地獄」は現世と離れて離れざる心界を描出し「神智と神愛」は絶對無限性の神徳を説破し而して「神慮論」は實に此の神徳が萬物の上に現はるゝ所以を詳述したるものにして天界地獄の遍歷者神祕界の大主神學界の革命家たるス氏の所説を知らむと欲する者は本書を讀め

21195

加藤咄堂先生新著▲教育家宗教家無二の寶典

通俗講話の論理方法

總クロース箱入
定價 九十錢
郵税 八錢

文部省が一たび通俗教育調査會を設立し通俗講話の必要を鼓吹するや天下の教育者翕然としてこれに靡き市府縣の教育會より郡村の教育會に至るまで擧げて通俗講話のために努力せざるものなしたゞその最も憾みとするところは講話者その人を得ることの難きにあるが如し惟ふにこれ現時の教育界宗教界學術界を通じて演説教講義を爲す人の乏しきがためならずしてたゞ通俗講話の理論を知悉し方法に慣熟したる人の少きがためならずんばあらず

本書は通俗講話に多年の研究と豊富なる經驗とを有せる加藤先生が帝國教育會東京府教育會及その他各府縣の教育講習會の懇請によりて親しく通俗講話の理論と方法とを説述せられたるものを基礎となし更にこれに幾多の講話材料を増補してこの一卷を成す洵に斯界空前の新著たり苟も講壇に立たむと欲する人一たびこの書を繙かむか忽にして一個理想的の通俗講話者たるを得む
弊社がかゝる實益と趣味とを併せ有する名著を出版してこれを世の演壇上の人士及び將に演壇に立たむとする諸君の前に提供することを得たるを甚しく光榮とするものなり

東京東區石川町六八六一番 丙午出版 東區石川町三五三番 鷄聲堂

終